

春秋命歷序考

上

口 12  
3096  
1

春秋命歷序考



12  
3096  
1-2

556

12  
3096  
1

春秋命歷序考自敘  
古人有言曰。天地者生之本也。先  
祖者類之本也。君師者治之本也。  
是大道之三本。而皇國則万国之  
三本也。是以彼西戎之蕃。赤縣之  
州。亦我神真爲之君。爲之師。而開  
闢之。含卷之。使蠢化蠕動。始有倫

理。穴居野處。方有教養之國也。是故政刑兵陣律曆度量文字卜筮醫藥。凡所以經綸天下。而百世不可刊。綱紀民用。而一日不可闕者。亦皆我神真所授之道也。上皇太一之爲一也。盤古真王之爲二也。三皇之御三戈也。五帝之紹五運。

也。可以見矣。唐虞之世。夏后之時。人質物朴。猶能道此道教。此教焉。夏后氏亾。而大道斯廢。擬聖乃出。殷篡周弑。而六親不和。國家昏亂。於是乎始有儒矣。從是以來。儒流之書日出。百氏之說益盛。視大道如異端。見神真如物怪。以爲荒唐。

不經。非我所宗。其所以下以經綸天下。  
綱紀民用者。變為覲覲之器。化為  
虛偽之具。嗚呼。天之未喪斯文也。  
神典之所傳。玄經之所識。與古籍  
之明文。先聖之至言。雖遭歷代之  
災亂。似一縷之不斷。而尚幸有炳  
焉。如日月。確乎不可拔者。造次顛

佈。思之。思之。而神開我心。使我宗  
我所宗。若夫儒流百氏。猶子孫而  
詈先祖。枝葉而惡本根也。豈足復  
知大道皇國之所以為三本哉。然  
其起伏興廢。亦復非一。而其存于  
今者。大抵有八家。曰神。曰玄。曰儒。  
曰佛。曰醫。曰兵。曰易。曰曆。雖然。其

在王公大人者。非吾輩所能知也。  
唯至於卑賤如余者。自成一家。則  
神家不知。神道。玄家不知。玄理。儒  
家不知。儒旨。佛家不知。佛意。醫家  
不知。醫範。兵家不知。兵機。易家不  
知。易威。曆家不知。曆式。而各游泳  
於一潦。未見驪龍之變化。彷徨於

孤埵。未覩崑崙之極天。夏蟲疑冰  
雪。井蛙怪江湖。生於此國。而無此  
國。仕於此君。而蔑此君。不知神真  
君師之德。開闢含養之恩。則一也。  
故吾爲之恐懼。著述考徵。既軼百  
部。且踰千卷。又近者著太昊古曆  
傳。三曆由來記。古曆日步式。月步

式。弘仁歷運記考。古史年歷編。古  
今日契曆。夏殷周年表。三統歷譜  
辨。春秋曆本術編。及此書。以明古  
曆之真式也。夫曆所以論天常。志  
長久也。然泰古之世。年曆之數。紛  
紜不一。定孟浪無講明。其譌實起  
于殷。西伯周姬昌矣。蓋既有流派。

奚不溯於原泉。苟有年曆。敢不推  
乎泰古。且以余觀之。何道不欲一  
定之。誰人不願講明之。而稍有識  
者。輒有蛇足之過。其不然者。徒有  
彘測之嘆。抑人長而不知其年之  
經歷。我身之長短。雖曰不愚。吾不  
信也。吾爲之憤悱。獨採春秋命歷

序。祖述之。憲章之。訂正錯簡。補綴  
脫文。參伍之。於弘仁歷運記。錯綜  
之。於明文。與至言。方始明神真所  
授之道。實神典所傳之說。乃似口  
脍之結符節之合也。吾既回大澤  
於一步。拯將墜於千仞。於是乎足  
以爲金鈴木舌。而一振文教矣。不

然。與不知其年之經歷。我身之長  
短者。莫以異焉。方今海內昇平。文  
物鼎新。上有擊壤之化。下有鼓腹  
之樂。博覽多通之戈。典故考證之  
家。凡數十百人矣。然而一定之講  
明之者。蓋或有之。我未見之。則其  
數十百人。亦猶一凡庸耳。復安得



論天常志長久者乎。雖然人人將  
曰其所祖述憲章亦惟爲讖緯之  
書其所訂正補綴亦皆取之乎臆  
斷余雅謂士君子待知己於千載  
豈求善價於今日哉苟有奉帝道  
唯一之學學日絲幽無敵之道者則  
將一日擊手而思過半矣彼凡庸之

徒雖提耳而曉之不能使之遂信  
之也我惟宗我所宗亦豈求信乎  
不信之人哉

昔從

太昊作甲曆甲寅歲而來四千八  
百四十年。天會日天會  
大日本天保四年歲在癸巳孟冬

大九日庚子。四辛癸。癸日。孟冬  
太一在干中宮。天禽日。天禽時。

大壑 平篤胤自敘

大壑 平篤胤撰述  
武藏國 森田昌成  
上野國 生田國秀  
武藏國 碧川好尚

春秋命歷序考上卷



大壑 平篤胤撰述

門人

武藏國 森田昌成  
上野國 生田國秀  
武藏國 碧川好尚

同技

春秋命歷序考。春秋の古記緯書なり。近頃舶來せる明比  
孫穀が古微書といふ物也。大抵その全書れらむと覺し  
子擧て。隋經籍志。春秋緯十有三篇。無所謂命歷序者。諸書微  
引冥筮。歲代帝王。蘇運。顧多。主于命歷。則欲推遠古之聞。不得  
不列是書。矣。云。子。春秋緯十有三篇。此由來也。同書。漢  
の類字集の。五十篇。之。為。七。經。緯。各。自。其。篇。部。を。為。  
多。可。し。成。魏。世。了。宋。均。と。云。し。人。始。め。て。合。集。し。て。三。十。卷。を。

得る。總名を春秋災異といふ。而る。了緯と言ふ。始免春秋  
を主とし。諸書に徴引する。殊に疏を別とす。皆春秋緯と  
曰ふ。故に其詮次は先後に至りては。茫として辨ふ。こ  
少無し。梁此文思博く。春秋緯を要めて。猶三十卷あり。今惟  
ふ。階終經籍志。十有三篇。其目あり。漢孔圖。元命苞。文耀  
鉤。運斗樞。咸精符。合誠圖。考異郵。保乾圖。漢合藥。佐助。期握。誠  
因。潛潭。已。說。題。辭。是。然。也。考。異。郵。保。乾。圖。漢。合。藥。佐。助。期。握。誠  
今は全書一も傳はらば。諸書に徴引せらば。如し。此。等。此。緯。書。也。同  
書。了。出。せ。る。茂。見。依。り。外。形。し。此。考。了。就。て。は。往。く。引。て。此  
引。用。ふ。る。事。有。る。故。了。す。其。由。來。を。記。し。以。て。往。く。引。て。此  
命。歷。序。を。此。記。者。詳。然。ら。ば。最。末。の。條。に。魯。哀。公。が。十。四。年。謂  
ゆる。獲。麟。歳。あり。二。百。七。十。五。年。ふ。して。漢。代。起。れ。る。事。也。云  
依。文。あり。後。漢。の。歷。志。和。帝。が。永。元。十。四。年。詔。文。に。考。靈。曜  
命。歷。序。皆。有。甲。寅。元。と。云。依。を。始。免。往。く。引。用。し。多。し。前。漢  
此。世。に。成。れ。る。物。形。る。こと。著。く。其。躰。裁。を。察。依。り。此。を。甚。古

く聞えし。易歷と云ふ書。故本を為し。他書字を採合せて記  
せる物。亦ある有り。斯く魏の宋均が注あり。後漢に鄭玄  
書の往々引。以て其易歷を不書。其趣を古微書の洛書摘  
用せる事あり。以て其易歷を不書。其趣を古微書の洛書摘  
六辟。此殘文字。舉多る中。所見多り。其文小。孔子曰。洛書摘  
六辟曰。建紀者。歲也。成。姬。昌。有。命。在。河。聖。孔。表。雄。德。庶。人。受。命。  
握。麟。距。宋。此。羅。必。が。路。史。了。摘。七。易。歷。曰。陽。紀。天。別。序。聖。人。題  
錄。興。亡。州。土。名。號。姓。輔。爰。符。亡。殷。者。紂。黑。期。大。戊。倉。精。受。命。女  
正。昌。效。紀。承。餘。以。著。當。孔子曰。たり。著。當。と。云。あり。易。乾。鑿。度  
微。小。作。り。受。成。授。不。誤。小。も。出。て。鄭。玄。が。注。あり。其。文。小。距。を  
云。爰。を。交。り。作。り。誤。次。是。氏。没。六。皇。出。天。地。命。易。以。筭。絕。宋  
云。次。氏。没。始。穴。處。之。世。辰。放。木。頭。四。乳。號。曰。皇。次。屈。出。地。敦  
終。也。六。皇。此。下。人。數。者。也。

辰放次屈之名也。駕六飛。麟從日月。飛麟獸有翼能飛者。也。地教地名也。駕六飛。麟從日月。從日月謂猶其度也。治二百五十歲とあり。此古微書了出せる全文なり。其乾鑿度なる文此鄭玄が注小同し。然て古微書此文を何今是を考ふ書と可出せると云こぞ我云けり遺憾なり。今是を考ふ所。孔子が語小摘六辟字引文。其摘六辟又易歷曰を引ふれを。其古記こぞ知んし。然れども其識文中の殷紂王が事を云。海ハ更れり倉精受命とハ。周文王が云。海語形を殷此盛世。周のち不微く多項下記せる書れる事は論以無し。凡て讖緯の書類を易理を倚り曆法又因りて後世小必し有る事未然り考り知る事を專て載せる物あるが中。斯はくり符符る真識も無たり非福と多くは秦漢此世項下出し日者ら其事此既小有後小其識文字記して未然此識書小託せるが多れを慢り信じ難た物ハ有れど此摘六辟及び易歷はしを孔子を信じて引用し鄭

玄宋均等が注さず有れむ。此て其讖緯此書等。此讖文古真識形る小疑ふくれむ。此て其讖緯此書等。此讖文小を真贋あれど其小就て記し出せる古人が履歷及び道紀の傳説れど亦也。却て經史此類小漏せる。故實れ真文其間小錯在次れむ。遂古此學好む人參熟く擇びて取用。盈き物あり。然れを漢世小聞え高う董仲舒鄭玄れど。其説の真贋をも擇ば父廢作ある事あり。隋煬帝と云るが時了天下の家全書の亡失せる古微書此首記せるが如し。然る小此命歴序此殘缺れからん。如此存れしる事は是を謂也。天の未斯文を喪さ文と云物あり。此て其易歷此卦裁字思ふ了。此命歴序の第三章と。第十四章由て此文。其古説此殘文れる所思るを。上此摘六辟

小引多る文也合せ考ふ所了。天皇氏より黄帝小至依。十二  
辟始古傳説小。易讖字作更合せし書れる故了。易歴也名け  
起と聞え。洛書摘六辟てふ書を。其十二辟れ中ある。次是氏  
此次了。辰放氏也云。而之更。黄帝より六辟の傳を摘取了て。  
洛書此讖了合せし書れる故小。かく名けし物と聞也。然る  
尔上小引とる文也。下れ五辟れ飲る所也。辟字を爾雅は  
也見え。孫穀分記小も此。蓋姚諸帝矣。而帝干茫眇。斯て今此  
之代間取。其道徳尤玄者。靳干六君云也言了。命歴序也。其易歴字專也取りて。天皇氏より次く小。命歴受  
て王者也為れ。諸辟の。歴序字記せ依義字以て。號けし書  
名也聞えあり。此を前也。別了春秋命歴也云ふ書ありて。  
其序れる故了。かく云く也。思了れ也。然尔は

非也。此て如此考了定めて。章を逐ひて。徴し辨ふ所了。黄帝  
以往也。太古始年歴い也。詳小して。諸史尔載せる古王者此  
世數。それ紛錯荒唐此極。其難説も。一切尔掃除せら依れ  
バ。今是一字舉げて其百を廢し。殊了考究する也。本文の  
每下小述るが如し。然れも其も文義を法する所了。非也。多  
し是了就て先論ふ所了事あり。其は古昔此事實を。撰集せ  
る書此多かる中。司馬遷が史記は古けれ也。黄帝より筆  
を起せ依は。其以前此傳記は雅馴あらバ。迂怪此説多也。或  
嫌了りし聞えあり。其もし史記此自序小粗見え。五帝本紀  
載。竟以來。而百家言。黄帝其文不雅馴。虜紳先生難言。之云  
也云。依尔了知了。斯て史記尔採れる。竟以前此事の本説

之所思也。説の諸書了散見ある故。史記此文也。合せ見ると、其儒意は合する事をも不經と爲す。然と見えて、多く省記捨てざる有ける。其を別は著せる書。然れ亦三國に時。蜀に等みたり。論らふをえて知る。然れ亦三國に時。蜀に譙周也云ひしか。黄帝以前をも考す。記せり。謂ゆる古史考是なり。然れども其書早く滅びあり。諸書了引ふるを拾ひ津館叢書と云ふ物あり。其後亦西晋に皇甫謐が帝王世紀とるを見るを也外なり。其後亦西晋に皇甫謐が帝王世紀あり。此を庖犧氏と記し始免れども聞えよ。同世了王嘉が拾遺記と云ふ物有りて。黄帝以前に古説れも載せり。此は珍し。古説の往く見ゆる物なるが。例の迂怪此より後れる説有りて。我意ふる儒者らは嫌ふ物あり。此より後尔も唐に司馬貞が三皇本紀あり。此も史記に黄帝以前を取らぬ事を憤て。包犧氏。女媧氏。神農氏。此事を記し。因よ

天地人の三皇。尚も其餘の諸氏姓名も。擧るる故に補史記と題せり。此人は史遷が記す。三皇を缺するを憤れる。教化之先。既論古史。不全。近代皇甫謐作帝王世紀。徐整作三五曆。皆論三皇已來事。斯亦近古之一證。今並採而集之。其撰ひは未しく。然れ此後亦北宋に世了。司馬光が資治通鑑あり。其も周平王を記して。其以往をむけし措く。爰も劉恕が通鑑外紀。蘇轍が古史考と云ふ物あり。然れ亦司馬光。其外紀に驚され。其見えて。劉恕が死する後。別は周以前此事れも撰ぶ。誓古録と云ふ書を著せり。劉恕も司馬光が通鑑を物する時。其撰て其私作する者小加れる人形する。中途にして死れり。外紀して作する故に。劉恕が意も任せざる事あり。故に別

了外紀を撰 ちて此 三部之れ伏羲氏より筆を起せゆが。共  
せる形らむ。唯外紀此み。盤古氏より包犧氏まで  
の世も。自註尔粗く舉ぐれど。古史は更なり。誓古録不  
も。其大古也。世々事實を取ら文 斯て誓古録より伏羲之前  
如天皇地皇人皇有巢之類。雖於傳記有之。語多迂怪。事不經  
見余不敢引。獨據周易自伏羲以來叙之。云牙也。此を儒者  
此例の偏見あり。元々論より足らぬ。庖犧氏以前此  
事を早く周見よ。世の緯書等小も見えず。孔子も既り引用せり。  
其毛し取はし。謂ゆる周易此繫辭傳形も伏羲神農黃  
帝より取はし。毛取はし。謂ゆる周易此繫辭傳形も伏羲神農黃  
物形也。取はし。毛取はし。謂ゆる周易此繫辭傳形も伏羲神農黃  
此を周易取はし。毛取はし。謂ゆる周易此繫辭傳形も伏羲神農黃  
書を周易取はし。毛取はし。謂ゆる周易此繫辭傳形も伏羲神農黃  
をこれ孔子作と云ふ傳ふる。漢以來の俗説の據りや  
聞えて甚陋し。其書名を誓古録と號けし。尚書若  
誓古帝堯也。やう小書出せる。文字の據りや。聞也。且と緯

書此類ある傳記を採らば。光が見識を助けて云は  
は繫辭傳も更なり。二典三謨も取らぬ。然るは各其書  
此發語。若誓古某云云。後より古を追記せる物なり。  
了論を無れを然る。司馬光尚書と繫辭をかく一向  
見ぬらや。偏 其世も碩儒と聞えし徒の。然る偏見子慨せ  
派を見え。南宋此世も廬陵の羅泌也云ひし人。路史ち物  
を撰述せり。是れを目を留め書き。盤古氏より次く。伏  
羲神農黃帝此世もを経て。夏桀王が世まで。伏羲考證せり。彼  
國小傳より古道も。此世限り。類廢せれむ。實もをぬる  
終あり。然るに此人信じて古を好む心。此厚なり。覺え  
記と云ふ物も信用せし。過失は殊り大なり。今此考物も  
多し。多く其路史に對して論ふ。故は。此考物も  
無く。其餘此史類も。今此對致り足らぬ。は。此考物も  
〇 〇六

項は新安朱熹と云ふし人。かた資治通鑑を增益して。通鑑  
綱目と云ふを著し。其後明世に至りて。通鑑綱目前編れど  
有る。其は司馬光朱熹らか趣意小本たりる撰られど。粗太  
古此事茂も載せり。およ同世尔李純卿と云るが。草創せる  
世史類編也。王世貞を始め。後小出多る儒輩也。已か向く訂  
補せる。綱鑑の類も亦史也も數有る。然れど上代此事は。み  
れ路史を抄録して。其間也。他此傳説をも據ひて。補する物  
なり。其綱鑑ともを視る。後小抄録する。後此事小精け  
たり。其れ也。古代の事也。次く小例の儒見を用ひて。故實を  
失する説も多有り。然れか。世史類編も。其祖書なり。故  
り。古説を多く傳する。有け。然る。其類編の有や。其  
古代の事實也。大抵路史を其儘取。其由を云。其  
を最あちた無し。然るは其書廣漠也。有れど。路史の古を

考證せる。然りて。其功半也。當取べき。其  
り。後此綱鑑は。世史を採る。物あり。羅泌か。勞を誰も得  
る。羅泌か。功をせり。知しむ。原物なり。内て。世に史か  
く。區く。れるが。故也。今一書も據りて。古昔此真を察ること  
能は。是を以て。古人撰史此法り。効ひて。諸書を拔萃して。  
新は。本文字作。我か所見字自注して。西蕃太古傳と號け  
あり。蓋し。先師此神典学。本基。世は。云ふ。更改る  
せ。所業。有。斯。其。太古傳。黄帝。以往。年。歷  
世。數。は。一。向。此。命。歷。序。易。歷。傳。據。多。今。殊  
標して。命。歷。序。誕。妄。を。辨。し。其。易。歷。の。錯。乱。を。も。訂。正。せ。て。は  
得。有。は。じ。く。成。り。り。然。れ。を。此。は。太。古。傳。此。開。題。也。も。云。也。



くや。見む人お其意字得て在るし。

一自開闢至獲麟二百二十七萬六千歳分爲十紀。每紀爲二十六萬七千年。凡世七萬六百年。一曰九頭紀。二曰五龍紀。三曰提提紀。四曰合雒紀。五曰連通紀。六曰序命紀。七曰循蜚紀。八曰因提紀。九曰禪通紀。十曰疏佐紀。

是第一條は固より信られぬ説あり。世は通説に成されバ黙止のめく。今其妄多辨るむ。先開闢は天地初判の時字云ふ。獲麟とハ春秋魯哀公十四年比下。西狩獲麟と何る年比事あり。然るも開闢より其年まで二百二十七萬六千歳を依字。十紀亦分る云。然る人皇氏の世を爲る

九頭紀を其一と爲多るは何ぞや。然るは人皇あ開闢此初出たりむや。前よ天地二皇並びて在り。尚其上盤古氏あり。下小出る本文及び三五曆紀始學篇れと。實録に古傳に歳數の據れを。開闢より人皇氏まで。亦三萬六千歳あり。然る此字措きて。人皇は開闢の初發を係る依を。鹿畧小非文や。但此も余歴序此の事非也。下小引出も其積年の數こそ各く差なり。皆人皇より獲麟まで。二の歳數ふれむ。其鹿漏これに准りて知る。諸海に二百二十七萬六千歳を十紀小等分しては。每紀二十二萬七千六百年と爲る。或每紀爲二十六萬七千年とハ何ぞや。引く書等此十字れし。然れを此も無算の人の加筆たりむも知る。海に凡世七萬六千

年々何る年は疑ふく世字を誤れるなり。下は引く三皇本紀此文は世と作るやてはて今叙り諸書小此類説此多る残取並て論はむり先三皇本紀。春秋緯稱自開闢至千獲麟凡三百二十七萬六千歲分為十紀。三世貞分綱鑑春秋元命苞曰獲麟之歲凡三百二十六萬七千年分為十紀とあり春秋緯稱元命苞を云々思ふ其歲數差五れば此も余歷序也二書字合せて凡世七萬六千世三百二十七萬六千春秋緯ハ云々有り一曰九頭紀二曰五龍紀三曰攝提紀四曰合雒紀五曰連通紀六曰序命紀七曰循蜚紀八曰因提紀九曰禪通紀十曰疏仇紀蓋疏仇當黃帝時制九紀間是以錄於此補紀之也と載し。文獻通考中此説字出して其説荒誕故七取焉と云々古微書小今此

本文の所尔按博雅天地辟設人皇以來至魯哀公十四年積二百七十六萬歲分為十紀注云帝王世紀自人皇以來迄魏咸熙二年凡二百七十二代積二百七十六萬七百四十五年分為十紀也云い。路史引二百七十六萬と云る數を次お舉る麟以前人皇までの年數なり七百四十五年と云る數も獲麟以後曹魏の元帝と云し咸熙二年おては數なり二百七十二代也云るも人皇より元帝までの王者は數も下小引く路史の謂ゆる九頭紀より禪通紀に至る百二十九姓は數をも拾ひ集めて入る數なり然て博雅は歲數を即世紀に從ふるなり是を以て注し其説を引く史其餘論了春秋命歷叙自開闢至獲麟二百二十七萬六千歲分為十紀漢嘉平中沛相計椽陳晃上言曆元不正謂自開闢至獲麟凡二百七十五萬九千八百八十六歲故易乾鑿度

〇

九九

春秋元命苞云。二百七十六萬歲。每紀為一十七萬六千年。廣雅因之。均為誕妄。乾鑿度此全書。今傳はれど此文なく。古微書尔拾以收。元命苞亦此。文あり。共了漏落。按禮含文嘉推以上元為始。起十一月甲子朔。且冬至。日月五星俱起。牽牛之初。是為曆本。故鄭玄云。上元者。太素以來所求之年也。唐李淳風推自麟德元年甲子。上距上元甲子。積終二十六萬九千八百八十載。而僧一行以大衍數推上元甲子。積距元甲子。亦止得九千六百九十六萬一千七百有四十。是其日數也。然則太素以來之年。從可知矣。僧一行推之。積數も即李淳風が推する。二十六萬九千八百八十載の日數ある由あり。此二人が曆數了名高記こぞ人此能く知る所あり。然れど此をみ形實數おそ合は夫一十九萬る物あり。其由を未論ふ字見て知るを。

一千八百四十歲而反太素冥莖。此道之根本也。唯蹟於曆數之理者能知之。形と云あり。此說す本史人皇氏の傳れ所おも出せる。其所為一十七萬六千年と云る文を一十六萬七千年とあり。共了り同人の説よしてかく齟齬せるは何ぞや。然て此節ある唯字も。本ハ二所共了推字をれど。此を誤字れること疑ひ無れを己が意をもて改めあり。けりて右諸説の紛々ある。其從來を如何や考ふべき。其原を周西伯が妄意も出て。古傳に實數を一枚も無く。後次々も出し徒然。古説を固く守ること能は文。其實數字攷數するを能は文。其臆も取りて。尚種々推法を立於文。其術をもて。己が向く推定免る數なる故り。かく區々るあり。此妄數れと西伯姬昌より起る事。然れを羅泌が下卷に委曲に論辨する字見て知るを。右等此諸説を廢斥せる論を信了理たり。然るも。其己が出せる。

一十九萬一千八百四十歲也云云數也。古傳此實數也。然其推法の定ぬること著し。然てハ共了五十步五十歩也。互り孰劣とも。笑ひ難文誕妄ある也。抑ゆる推法ども其起りは唐父子を経て。孔子は傳はりたし聞えて。乾鑿度ハ孔子曰てて求卦主歲術すと推即位術由極至徳之世術す。求水旱術れと云ふ術也有り。然れど皆論ふ不足。空考す。其說等なり。後了禮升威儀を見れむ。天運二十九万一千八百四十歳而反。大素冥莖蓋乃道之根也。何ん。然れも一十は二十の。はて其歳誤写ぬる。羅泌は是安數殘信せしめり。はて其歳數とを此信用不足は依上も。謂ゆる十紀の名も。信用尔足さばこそ勿論れり。然るは路史ハ甚く之を信じて。昔者太極洋而渾敦氏職焉。渾敦氏逸而二靈作。二靈後乃有十紀。疏仇之紀。自黃帝始。其歳之遠近置而勿論可也。

略餘列於右端と言ひて。一、九頭。是為一姓紀。真源賦云。人皇爲九頭紀也。二、五龍。是謂五姓紀。真源云。五姓衆雲車而爲九頭紀也。三、提。是謂五十九姓紀。孟詵錦帶前書謂之。拾提紀。太史公言九與是也。謂六十四氏。蓋併五姓而言。四、合。是謂二姓紀。或作而。所謂三皇者。乃合維之三姓也。五、連。通。是謂六姓紀。或作連。連通。六叙命。是謂四姓紀。真源賦。俱非也。六、通。是謂六姓紀。或作連。連通。六叙命。是謂四姓紀。真源賦。俱非也。七、循。蜚。是謂二十一姓紀。後付七十二姓。駕六龍而治天下。七十。二姓者。提合維。連通。叙命。之四紀也。八、因。提。即十有三姓也。雄書云。三皇號九頭紀。紀古有。循飛紀。八。因提。即十有三姓也。九、禪。通。是謂十有八姓紀。提紀。次。連通紀。次。叙命紀。次。因提紀。次。五帝號五龍紀。次。攝史。皇氏之通封禪。十。疏仇。自黃帝氏而紀。司馬貞曰。九紀之間。者十有八姓也。十、疏。仇。自黃帝氏而紀。司馬貞曰。九紀之間。豈惟數千百載。三二十皇而已哉。而莊周之說。易姓而王。封秦

山禪梁甫者。蓋七十有二代。其有形兆整堦者千八百餘所。然則宇宙之端。握符登紀。為萬物之主者。可勝記耶。其記此所の自注了。鄭玄六藝論云。遂人後歷六紀九十一代。至伏羲始作十二言之教。方叔機注云。九頭一五龍五。攝提七十二。合洛三。連通六。叙余四。凡九十有一。如鄭所言。則十紀皆在。遂人之後。而四紀又在。伏羲之後。非也。馬統之徒。俱謂十紀通百八十有七代。又云。伏羲前六。後三。各立一年。歲亦惟取據徐整等。爾皆不可。猶也。云。予。其。本。文。注。共。了。ふ。か。諸。書。引。れ。ん。今。は。文。を。約。め。て。引。り。其。を。皆。論。ふ。以。て。其。本。史。の。據。に。丹。壺。記。と。稱。ふ。物。字。取。り。了。予。既。得。丹。壺。名。山。之。記。獲。遂。帝。王。之。世。乃。知。天。味。喪。斯。文。也。丹。壺。書。初。有。盤。古。氏。天。皇。氏。地。皇。氏。九。皇。氏。而。有。鉅。靈。句。疆。譙。明。涿。光。鈞。陳。黃。神。狽。靈。天。騏。鬼。騏。奔。燕。秦。逢。冉。相。蓋。盈。大。鼓。雲。陽。巫。常。泰。壹。空。桑。神。民。倚。帝。次。民。是。為。

循蜚紀有號而無世。皇次四世。蜀山倭傀六世。渾敦七世。東戸十七世。皇覃七世。啓統三世。吉夷四世。九渠一世。狝葺四世。大巢二世。遂皇四世。庸成八世。凡六十有八世。是為因提紀。倉頡一世。柏皇二十世。中央四世。大庭五世。栗陸五世。鹿連十一世。軒轅三世。赫昏一世。葛天四世。宗盧五世。祝融二世。昊英九世。有巢七世。朱襄三世。陰康二世。無懷六世。凡八十有八世。是為禪通紀。可謂備矣。此予之史篇所取獻者也。言予已本書此近異のして。初学於倫れど。其意を得れど。按は依れど。今は其文を取直して引り。依れど。鈞陳より倚帝あり。十七氏の名を本小涿光。以次。至。次。氏。氏。如。下。所。叙。と。云。て。畧。せ。れ。也。見ゆ。り。便。宜。々。ら。む。事。を。思。ひ。て。本。史。に。叙。す。る。名。を。取。り。て。出。せ。り。本。書。と。合。せ。見。て。已。今。熟。く。此。謂。由。依。丹。壺。記。云。私。心。事。を。察。す。也。〇

不物字視る。柏皇氏以下十五氏も。其世教二也信うれ  
れ。六韜。莊子。遁甲開山圖。如などを採合せて載多る。本據  
有れど。其由を第十一條。柏皇氏。倉頡より上。鉅靈云。海で。  
三十六氏。世次も。全信。其世教。然。諸氏。中。黄神。  
拒神。次民。皇次。皇覃。五氏のみ。是命。歷序。歷叙。依。易。歷  
此。確乎。多る。古説の王者。人皇と柏皇。其間。ある。世次  
も。此。五氏。止。海。下。本文。註。如。其間。  
小連。三十一氏。其名。等は。諸書。其氏。と。出。多る。を。見  
海。隨。採。集。め。如。不。妄。名。氏。も。差。加。る。名。山。丹。壺。と。見  
出。多る。秘典。小託。して。世。を。欺。ける。奸人。の。所。為。如。る。之。也。疑

ひ無し。其は既。生民。有。ける。より。其。生。民。の。蕃。息。次。る。小。隨  
り。某。氏。也。呼。ぶ。が。常。如。れ。諸。書。其。氏。と。云。名。多。く。見。ゆ  
る。を。某。氏。也。始。有。れ。を。証。ひ。て。王。者。如。り。之。為。之。を。拾。ひ。  
よ。山。海。經。を。始。め。地。志。如。類。ある。地名。依。り。其。名。と。云。  
或。今。其。氏。と。出。る。書。名。委。曲。云。む。易。事。如。也。所。  
狭。き。舉。あ。れ。も。漏。し。其。具。眼。如。り。む。人。如。云。を。聞。く。  
は。忽。ち。悟。海。或。は。此。字。路。史。氏。杜。撰。之。疑。小。倫。等。も。有。れ  
き。事。如。也。或。は。然。れ。ど。其。全。書。如。熟。讀。み。亦。比。類。有。海。じ。古。史。学  
如。篤。志。如。在。し。は。決。然。て。此。人。如。所。為。非。文。他。如。秘。惜  
如。海。字。辛。く。して。得。り。む。固。く。信。じて。古。を。好。む。性。如。也  
ハ。太。古。如。傳。記。の。之。如。知。難。交。を。甚。く。索。め。探。如。侘。り。多  
間。如。其。記。字。得。て。覺。え。欺。り。し。物。あり。達。識。人。如。云。首  
也。篤。く。其。道。を

○

好むを為ては取は放して然る欺を受取らざるも。亦此  
節くあふ事取らば吾が黨は小子ら能く用意を盡し。亦此  
丹壺記の類ある偽説也。古三墳と題せる書は太古者生氏  
之始也。男女構精以女生為姓。始三頭謂之合雉紀。生子三世。  
合雉氏没子孫相傳謂之叙命紀。通紀四姓。生子二世。是謂連  
通紀。生子一世。通紀五姓。是謂五姓紀。男女衆多分為九頭。各  
有居方。故號居方氏。生子三十二世。強弱相迫。中有神人提挺  
而治。故號提挺氏。生子三十五世。通紀七十二姓。故號通姓氏。  
有巢氏。生太古之先。天下九頭咸歸。有巢始君也。通姓氏之後  
也。燧人氏。有巢子也。伏羲氏。燧人子也。云云。是なり。羅泌も  
既く此説を論じて。大率此書雖有所取。然淺陋每難據云云。

言分り。此書は序者宋は毛漸が偽作なり。云云。胡應麟  
の文。及は偽妄の殊り甚し。記者取らば。然らば書中の  
希の。絶て後人の思ひ寄はれ。古傳は真説も交り存り  
故。路史も往く用ひて。故實を徴せし事あり。偽存り  
書好まると。一概に捨むる。思慮は委らば。抑右紀  
號は説くは。彼此共り其本も。後人杜撰妄誕。出多る故  
了。下は出易歷古説也。互に冰炭相反して。此字取ら  
ば。彼我捨盡く。彼を取らば。此字捨盡く。兩用を互に記説れ  
る。彼此共り。此命歷序も載多る事也。然次は周代の始  
り。世り用を奮せる説ある故也。此をも姑く載し遺せし  
と見ゆ。然れど予は其真字擇ひて。固く之を執取者れば。  
次く出易彼古説を取りて。此紀號は偽説をば。廢斥次は

○

也。右如如し。淑人々々察てまは眞を擇びぬらし。

古昔天地未分混沌如雞子。盤古氏生其中。萬八千歲天地開闢。清輕者上為天。濁重者下為地。盤古在其中。一日九變。神於天。聖於地。天日高一丈。地日厚一丈。盤古日長一丈。如此萬八千歲。天數極高。地數極深。盤古極長。數起於一。立於三。成於五。盛於七。處於九。盤古氏夫妻含易之始。陶鎔造化之主。天地萬物之祖也。盤古氏之後。乃有三皇。此天地人之始也。

此一條元。元より今に命歷序の出る文は非文。彼國に古學を為し人々。誰も見知りて在らむ。先秦に博士徐整が三五曆紀の文あり。諸書に引ふるが互に文は精畧あは

子。博く校合して出せ依なり。然依は此文も中疑なく易歷の古説なりし哉。三五曆紀の採りむが。後小本書に逸せ依故り。後世是文字引くふ。三五曆と然し。引らむと所思る。あや次節ふ云ふが如く。於此ふす於此文無ては。歴數の本基立けれをぬる。見む人異リみを為こす勿れ。三五曆紀引くる文等。を視依ふ。易歷の始め。太古より傳はる古傳説り。本初なる。盤古開闢の時より。三皇五帝の年曆を紀せる書なりし。や有る。其全書は傳はる。諸書に或る三五曆記と記す。字成も書し。然し。今に紀に有る。採用む。説郭あり。徐整長

三 天地初立有天皇氏。十二頭。澹泊無所施。為而俗自化。木德王。歲



起撰提。兄弟十二人立各一萬八千歲。地皇十一頭。火德王。一姓十一人興于熊耳龍門等山。亦各萬八千歲。人皇九頭。乘雲車。駕六羽出谷口。凡弟九人分長九州。各立城邑。凡一百五十世。合四萬五千六百年。

彼三皇本紀了。庖犧氏女媧氏神農氏。三皇也。立多末小。下說三皇謂天皇地皇人皇為三皇。既是開闢之初。君臣之始。圖緯所載不可全弃。故兼序之。云云。此其本文也。一字之差。は惣字記し出て其自注了。出河圖及三五曆也。云云。然れを此其本文也。河圖及三五曆を採合せて載せ。所説なる。ウ也。思あり然。亦は非也。彼此共了。も。易歷の古説なる哉。

彼も此も採載せ。後次く。文飾此語。後人。注文あど混入して。右如くは成れる。なり。司馬負也。此命。命歷序と相似。多る能く見れ。皆別書。行ると也。其三皇の傳。はさ。今其本文。同ければ。実也。故今その同文。諸書。散見。を聚めて。之を校せむ。也。項竣始學篇。天地立有。天皇氏十三頭。號曰天靈。治萬八千歲。以木德。王地皇。十二頭。治萬八千歲。興於熊耳龍門山。人皇九頭。各三千三百歲。依山川土地之勢。裁度為九州。各居其一方。因是而區別也。見。始學篇。其全書。今傳はら。項竣と云。人の傳。あり。詳。あり。此。文。唐。徐堅。が。初學記。及。路史。より。古。微。書。を。引。合。三。五。曆。紀。云。溟。滓。始。牙。濛。鴻。滋。萌。歲。起。撰。提。して。再。引。あり。

○

元氣肇啓有<sub>レ</sub>神靈人<sub>一</sub>號<sub>二</sub>天皇<sub>一</sub>一人十三頭有<sub>レ</sub>神人一人十一頭  
號<sub>二</sub>地皇<sub>一</sub>人皇一人九頭百五十六代合<sub>レ</sub>四万五千六百年とあ  
り。此<sub>レ</sub>文も五行大義初學記路史注事物紀原說邦其<sub>レ</sub>今此等  
餘の諸書も引くるを校合して引くるなり。比<sub>レ</sub>說を合せて本文を攷ふ所は海<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>天地初立の下<sub>レ</sub>三五  
曆<sub>二</sub>を依りて<sub>一</sub>溟滓始<sub>レ</sub>牙濛鴻滋<sub>レ</sub>萌<sub>レ</sub>歲起<sub>レ</sub>撰提<sub>二</sub>元氣肇啓<sub>一</sub>と有る  
十六字を補ふ處し。斯<sub>レ</sub>て澹泊無<sub>レ</sub>所施<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>而俗自化<sub>レ</sub>と云ふ所十  
字は決めて後人此<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>也加<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>し文<sub>レ</sub>なり其<sub>レ</sub>はかく様<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>也  
後<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>葛天氏朱襄氏<sub>レ</sub>と此<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>頃<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>微妙<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>也云<sub>レ</sub>を雜  
考<sub>レ</sub>此事<sub>レ</sub>なり。三皇<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>の中<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>卑<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>なり。此<sub>レ</sub>を古  
意を得<sub>レ</sub>らむ人を自<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>なり。委<sub>レ</sub>くは云

は<sub>レ</sub>父<sub>レ</sub>殊<sub>レ</sub>り此<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>の施<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>の大<sub>レ</sub>なる也<sub>レ</sub>化<sub>レ</sub>俗<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>は  
少<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>なり非<sub>レ</sub>次<sub>レ</sub>なり其<sub>レ</sub>を太古傳を視<sub>レ</sub>て知<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>は  
然<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>を此<sub>レ</sub>十字を去<sub>レ</sub>て此<sub>レ</sub>間<sub>レ</sub>に始<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>篇<sub>レ</sub>に號<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>天靈<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>木德<sub>レ</sub>王  
とある<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>五字を補<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>し。あ<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>抵<sub>レ</sub>四字<sub>レ</sub>なり  
と<sub>レ</sub>歲起<sub>レ</sub>撰提<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>撰提<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>疑<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>後人<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>狡<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>なり  
其<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>考<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>撰提<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>撰提<sub>レ</sub>格<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>畧<sub>レ</sub>語<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>寅<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>あり  
由<sub>レ</sub>りて爾雅<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>支<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>載<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>  
元<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>られ<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>等<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>張鼎思<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>說  
大<sub>レ</sub>琅邪代醉編<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>歲易<sub>レ</sub>歲名<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>爾雅<sub>レ</sub>郭璞<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>詳<sub>レ</sub>楊升菴<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>  
簡<sub>レ</sub>閩<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>莫<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>典<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>次<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>詩<sub>レ</sub>春秋<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>尚<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>辛<sub>レ</sub>壬<sub>レ</sub>癸<sub>レ</sub>甲<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>甲  
後<sub>レ</sub>庚<sub>レ</sub>詩<sub>レ</sub>吉<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>庚<sub>レ</sub>午<sub>レ</sub>朔<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>辛<sub>レ</sub>卯<sub>レ</sub>春<sub>レ</sub>秋<sub>レ</sub>紀<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>昭<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>奈<sub>レ</sub>意<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>漢<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>術  
家<sub>レ</sub>創<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>藏<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>隱<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>術<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>竄<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>爾<sub>レ</sub>雅<sub>レ</sub>堯<sub>レ</sub>舜<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>代  
恐<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>稱<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>愚<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>等<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>周<sub>レ</sub>末<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>撰<sub>レ</sub>提<sub>レ</sub>孟<sub>レ</sub>陔<sub>レ</sub>己<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>  
楚<sub>レ</sub>詞<sub>レ</sub>矣<sub>レ</sub>陳<sub>レ</sub>氏<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>編<sub>レ</sub>司<sub>レ</sub>馬<sub>レ</sub>負<sub>レ</sub>索<sub>レ</sub>隱<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>收<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>氏<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>之

○

時即有<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>尤<sub>レ</sub>謬<sub>レ</sub>淮南子天文訓中細解其義惟以月令為<sub>レ</sub>至  
支于配合而言<sub>レ</sub>尔雅又<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>月易月名大抵歲名月名雖<sub>レ</sub>不可<sub>レ</sub>解  
而于支紀<sub>レ</sub>日不<sub>レ</sub>紀<sub>レ</sub>歲月<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>然耳<sub>レ</sub>然耳<sub>レ</sub>然耳<sub>レ</sub>以後漢書<sub>レ</sub>歷志<sub>レ</sub>二所  
詩書可<sub>レ</sub>攷<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>久<sub>レ</sub>り  
おも<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>歷序<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>甲寅元<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>る語有<sub>レ</sub>き今本<sub>レ</sub>其語見<sub>レ</sub>えさ  
る<sub>レ</sub>撰提字<sub>レ</sub>と甲寅<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>しを改<sub>レ</sub>る文字<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>と疑<sub>レ</sub> 〥  
無<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>を甲寅<sub>レ</sub>の二字<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>を撰提<sub>レ</sub>とば<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>て  
た<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>る星<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>ある<sub>レ</sub>混<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>しく<sub>レ</sub>実<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>闕<sub>レ</sub>途<sub>レ</sub>撰提<sub>レ</sub>格<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云  
は<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>甲寅<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>只<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>四字<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>欠<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云  
整<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>考<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>總<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>く  
おも<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>深<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>總<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>く  
兄弟<sub>レ</sub>十二<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>各<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>姓<sub>レ</sub>八字<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>撰<sub>レ</sub>提<sub>レ</sub>文<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>削<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>萬  
八千<sub>レ</sub>歳<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>四字<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>前<sub>レ</sub>條<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>唯<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>萬  
古文<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>ゆる<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>爾<sub>レ</sub>火<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>姓<sub>レ</sub>十一<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>有  
も<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>爾<sub>レ</sub>火<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>姓<sub>レ</sub>十一<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>有

る<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>撰<sub>レ</sub>提<sub>レ</sub>文<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>始<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>篇<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>天皇<sub>レ</sub>氏<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>木<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>王  
と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>稱<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>傳  
の<sub>レ</sub>正<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>本文<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>び<sub>レ</sub>次<sub>レ</sub>條<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>火<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ  
也<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>運<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>承<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>筆<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>こと<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>そ<sub>レ</sub>は  
太古<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>尔<sub>レ</sub>委<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>が<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>天皇<sub>レ</sub>氏<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>婦<sub>レ</sub>妹<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>同  
時<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>興<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>ず<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>火<sub>レ</sub>承<sub>レ</sub>木<sub>レ</sub>  
と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>例<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>伏<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>氏<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>木<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て  
木<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>婦<sub>レ</sub>妹<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>女<sub>レ</sub>媯<sub>レ</sub>氏<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>同  
二<sub>レ</sub>條<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>考<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>悟<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>按<sub>レ</sub>ず<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>大  
義<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>曆<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>頭<sub>レ</sub>號<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>帝<sub>レ</sub>系<sub>レ</sub>譜<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>火<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>  
王<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>曆<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>火<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>也

帝系譜了。始めて云ひ出し語あるを。本文り取りて加ふ  
し也。り。そは三五曆ふ。をし此語有。形むおは。斯は。借  
り此短文。かく二書は引。返した物なや。借  
五行大義。春秋命歷序。曰。人皇九頭。宋均注云。兄弟九人  
洞紀云。人皇分治九州。古語實故。以頭數言之。とあり。然れ  
人皇の所。兄弟九人。と有。地皇一姓十一人  
也云。天皇小兄弟十二人。と有。宋均の注を。後人此和  
ぎ。本文尔。挿入せ。ゆ。著明あり。初学記。始学篇の。天  
皇十三頭。と云ふ。文を引。下。洞真記云。一姓十三人也  
也。あり。是。始学篇。人。數。を。云。け。り。故。洞真記。を。引  
く。地皇。一。姓。十一。人。也。加。ふ。は。此。文。り。効。る。引  
る。借。り。地皇。此。姓。十一。人。也。加。ふ。は。例。四。言。此。句。り。合  
さる。故。兄弟。十二。人。立。各。一。万。八。千。歳。と。十二。字。句。を。合  
せ。す。地皇。所。も。兄弟。亦。各。萬。八。千。歳。と。句。を。為。り。む。

兄弟此二字を脱。然れを地皇此所。火徳王。一姓十一人  
也。しと見え。り。此所。世史類編。多。號曰。地皇。と有。四  
字を補ふ。其は。天皇氏。の。文。號。曰。天靈。也。有。四。對。語  
は。頭。は。宋均。が。言。古語。實。故。以。頭。數。言。之。云。如。く。  
十二頭。云。は。即。十二人。と云。ふ。語。は。是。也。既。小。語  
足。を。再。十二人。と云。む。重。語。也。況。て。此。兄弟。の  
ら。文。洛書。靈。准。聽。水。經。注。地。皇。面。貌。皆。如。女。子。而  
相。類。也。人皇。九。男。相。像。と。有。り。て。其。分。身。の。物。也。然  
後。子。作。史。等。却。り。て。幾。頭。と云。ふ。語。を。除。き。て。兄。弟  
若。于。人。也。云。ふ。語。を。存。せ。る。は。無。識。と云。ふ。語。を。委。く。は  
太古。傳。就。は。て。其。頭。を。云。ふ。人皇。九。頭。也。異。説。無。れ。也。

天地二皇をハ。本文及び三皇本紀云。天皇十二頭。地皇十一頭。有るを。三五曆云。天皇十三頭。地皇十一頭。見之。始學篇云。天皇十三頭。地皇十二頭。とあり。此は孰れ正説なるや。云云あり。三皇の心一也。有るは。皆古記誤字を承あるに。其は水經注の。開山圖を引きて。天皇十二人。分五方。爲十二部。とも見えて。十二也。有るは。正數なり。斯く地皇も其の部を。分身次第も。二皇必同數の條。厚又道理の也。是も十二也。有るは。正也。爲也。然るは。路史云。天皇十三頭。地皇十一頭。春秋緯言。天皇地皇人皇。皆九人。分爲九州。長天下。故河圖括地象云。天皇九翼。蓋輔翼者九人。爾易通卦驗云。天皇氏輔有。三名。注云。三輔。公卿大夫也。三輔九翼。傳皇是。十三人。云云。固より。分身次第義を知らず。云云。説あり。論あり。足ら

ど。春秋緯と引多るは。保乾回行るが。古微書の出るる文を。見ると。皆字なく。説部引多るも。天皇地皇人皇兄弟九人。分九州。長天下也。と有りて。兄弟九人云くは。人皇の。此係りて。上は二皇の。係りて。文は非ざる物也。云云。人皇の所。有る。乘雲車。駕六羽也。雜書の據。王。羅泌が。乘雲車。駕六提羽也。改。每。従ふ。履し。本は。如く。云。は。句。通。え。後。も。次。弟。兄弟也。云。云。り。城邑と云。は。由。を。十二字は。路史の。雜書に引くるが。兄弟云くは。更なり。各立城邑。如と云ふも。當昔。有。様。の。叶。は。後。人の。文。飾。を。削。り。去。履し。次。云。九。一。百。五。十。世。也。は。人。皇。の。子。孫。の。然。は。り。相。續。して。世。を。治。は。義。あ。れ。ど。此。は。下。出。る。人。皇。氏。没。拒。神。次。之。と。有。る。正。文。は。合。は。る。荒。唐。の。説。云。取。る。足。ら。ず。然。て。此。世。數。の。

○

取はり足ざる上を合四萬五千六百年と云ふ歳數也。取る  
 不足は事は云ふも更なり。然れを凡字より下十四字。み  
 削去し。路史注、三五曆云、人皇百五十六代、合四万  
 五千六百年、小司馬取之不足、稽也。云、此、  
 此、四万五千六百年も、謂ゆる、一百五十九世、此、歳數、云、  
 此、同史、引、真源賦、人皇兄弟九人、四百五十六  
 百年と云、然れを、今、本文、三五曆、云、真源賦、  
 依、後、書、加、易、歷、古、文、尚、書、旋、璣、鈴、云、  
 此、人皇、氏、傳、載、之、尚、書、旋、璣、鈴、云、  
 所、思、此、各、立、城、邑、云、以下、文、是、古、傳、の、本、色、  
 千歳も、取る、不足、は、云、云、此、は、正、し、古、傳、也、諸  
 書、の、異、説、あ、事、々、殊、亦、歷、年、の、實、數、も、符、合、次、る、也、  
 伏羲、氏、の、所、云、如、此、人皇、氏、の、所、云、歳、數、の、類、非

異説、如、路史、引、真源賦、  
 八千餘年、云、三皇、經、二、万、八、千、歳、と、有、取、  
 二、誤、写、也、有、八、千、餘、年、云、共、  
 元、合、さ、き、を、據、る、足、り、に、其、も、第、十、二、條、伏、羲、の、所、  
 但、し、其、萬、八、千、歳、也、天、皇、氏、の、萬、八、千、歳、畢、り、地、皇、  
 氏、の、萬、八、千、歳、を、經、る、義、は、非、也、路、史、引、河、圖、  
 及、帝、系、譜、云、天、地、二、皇、俱、萬、八、千、歳、と、云、如、此、  
 是、歳、數、を、歷、る、義、有、り、然、ら、ば、  
 人、皇、氏、の、歳、數、の、み、其、古、説、は、無、り、言、ふ、り、彼、始、學、篇、の、  
 皇、九、頭、各、三、千、三、百、歳、と、云、二、皇、の、歳、數、の、萬、八、千、  
 歳、の、多、少、相、應、し、下、論、の、歷、數、の、叶、ひ、て、  
 然、ら、ん、是、を、古、傳、の、實、數、と、り、  
 但、し、三、千、三、百、歳、と、云、  
 古、微、書、引、  
 〇  
 三十一

文又依れる事形るが、初学記より引あるを、三千字を脱せり。路史亦引あるも、此二字を脱せる所あり、誤りて其を正せり。分思ひるを、あむ此條此論の結びに、次條より云ふを見る處し。

四

又曰天皇氏以木王地皇以火紀人皇出暘谷分九河依山川地土之勢裁度為九州謂之九圍各居其一而為之長人皇居中州以制八輔。

此條はも中疑なく、前條と一連なる文形るが、本文舊注錯亂せるる。後人此他書をも挿入せ居たり。かく別條此如くは成れる物形り。かくて本書の、分九河の下、おす、人皇氏は、そは共の衍形る、三字あり、九圍は下、おす、九圍の二字あり、それ、憚ら文削り去り、以て其由を、路史亦、天皇より紀よ

至係十一字を、帝系譜云、と引交、人皇出暘谷云、此文、命歷序云、と引あり、羅泌が見る本、を、今本此如くは、一連此文を二書に分りて、然れ云、蓋し非文、然れを此、十一字、其より後形る人、帝系譜を取りて、加ふし文形ること、明あり、地皇は火徳を云、係も、上り論する如く、帝系、故、あ、十一字を削り去れ、又、曰、人皇出暘谷、と、然れ、此、七字も本文、非文、前條の、出、谷、口、と、云、る、下、小、在、る、し、當、昔、の小注、形る、誤り、て、本文、又、連書、せ、居、り、其、も、又、曰、と、有、字、は、文、形、り、し、こ、は、分、明、あり、し、ゆ、て、分、九、河、と、云、る、り、以下、は、本、文、形、る、が、此、上、始、学、篇、形、る、人、皇、九、頭、各、三、千、三、百、歳、依、山、川、土、地

之勢。裁度為九州。各居其一方。因是而區別の文之併せ見る  
小。各居其一。之云。海を互り文に出入こそ有れ。共古説此  
元文と知る。改。而字あり下。十三字此文餘なり。故爰は路  
史を取ると攷ふ所なり。雉書云。人皇兄弟九人。分長九州。已居  
中州。以制八輔。と云る文あり。凡て路史より。雉書云。之引る  
文を見ゆ。多く洛書と准聽  
と見えし。此文も即其書ある所。然れ  
ど今は其書傳はらざる。詳ふを知らず。然れども前條此兄  
弟九人。分長九州。と云ふを更攷り。此條も。而字あり以下此  
文は。此。雉書の依りて。羅泌より後形多人。作加多し文れ  
所ある灼然あり。其も羅泌が見る命歷序より。之し此文有  
形むるを。雉書を引。之し  
あや。既云ふ。はて。如此く考定めて。前條此條及於始學  
如。形むるなり。はて。如此く考定めて。前條此條及於始學

篇。三五曆。世史此文をも合せて綴り見ゆ。元書易歷。古  
文也。決めて天地初立。溟滓始牙。濛鴻滋萌。歲起甲寅。元氣肇  
啓。有。天皇氏。十二頭。號曰天靈。以木德。王萬八千歲。地皇亦十  
二頭。號曰地靈。興于熊耳龍門等山。萬八千歲。人皇九頭。乘雲  
祇車。駕六提羽。而出谷口。又曰。人皇  
出。暘谷。分九河。依山。川土地之勢。  
裁度為九州。謂之九圃。各居其一。因是而區別。各三千三百歲  
之。有。有。有。谷口暘谷は。同所也。異名也。即扶桑神州の地  
名なり。九州は。赤縣州也。稱ゆる九州云ふ  
は。非。父。世界。此。大九州を云ふ。其を  
太古傳。小委く。徴する。見ゆ。はて。路史此文。雉書  
適三辟。云。人皇別長九州。離良地。精生女。為后。夫婦之道始。此  
又。見。春秋命歷序。有。今本小見え。古微書也。此文

○



子雜書靈准聽之舉之。不審何事。殊尔適三辟之云。此も摘六辟之誤れるなり。

五

皇伯皇仲皇叔皇季皇少五姓同期俱駕龍號曰五龍九龍紀時有臣無官位尊卑之別。

次條。人皇氏没拒神次之。云云。依文の據れ。是所了此五姓之事の有るは突出尔似ぬれ。此を由ある事れ。其も遁甲開山圖尔。五龍兄弟五人皆人面龍身治在五方。五行神也。云云。如く。此は木火土金水也。謂ゆる五帝也。共了天皇氏の子也。當昔共了世に在りて造化の首を作す。其も三皇也。共了隱没して其神靈を終了。天尔五星及

び大微也。五帝座り留る。地尔。五方。大五岳尔止る。太古傳尔委曲了説著せ依が如し。其も史記漢書天家語水經注五行大義。其も緯書。其も類を取。並る見。明。甲五龍相拘絞也。其も有依を注して。五龍者五行也。水經注。遁甲開山圖云。五龍治在五方。為五行神。鬼谷子盛神法。五龍陶注曰。五龍五行之龍也。許謂。戊字之形象。六甲五行相拘絞也。云云。依説も既くも予然る。代補史記了。自人皇已後有五龍氏。按五龍氏兄弟五人。竝乘龍上下。故曰五龍氏也。載せる。始也。諸史。此を人皇氏。次了在治せる。王者也。為之依也。甚し。其も無誓也。所為なり。按ふ。司馬貞が此。其も決りて。其も承る。依あり。然るは帝王世紀。其も載せる。史記も大抵が紀を取りて。作ある。趣。其も見ゆる。其も皇南謚。

此命歷序をも見よる事也。世紀の文を諸書に引たる代  
察て知るれども。司馬貞が命歷序を見よる趣も。其著書に  
見えぬ。して九龍紀に有る九字を疑ふ。疑ふく五字を誤れるを  
り。然れども。五龍も王者の非はれむ。古く五龍紀に云ふ。紀  
號は有る由なく。其世無き有。臣無宦位尊卑之別。あど  
云ふ事は有べし。非は。然れども。九字より下十三字は。後人  
此挽入りたるを疑ふ。削去て可なり。前も龍字は頭  
頭紀の時。然有し。如云。如く思ふれども。あず其を人皇  
氏の世は似たり。史の黃神氏の所。賈公彦云。九頭  
紀時。有。臣無宦位尊卑之別。此も。して次條に初なる。人  
賈公彦が意と改めざるや有む。  
皇氏没。拒神次之と云ふ八字は。疑ふく。此條の結文も。元  
書易歷は。決て。皇伯。皇仲。皇叔。皇季。皇少。五姓同期。俱駕

六

龍號曰五龍。人皇氏没。拒神次之。之を有。けむ。然云ふ故は。五  
龍も三皇の世より出て。共小造化の首を作らむと。別り。世に  
有るは。非ざる故也。此所の附記。世の文。如きは。取らむ。  
人皇氏没。拒神次之。出。于長淮。駕。六。蜚。羊。政。三。百。歲。五。葉。千。五。百。  
歲。

此條は首文八字は。上り云。如く。前條は結文なる也。此は首  
文字。失ふは故也。此八字は。首文。為。多。は。二。也。疑はし。然  
らば。其。首文。何。在。けむ。言ふ。下。は。條。は。文。例。字。思  
ふ。惟。小。拒神氏。出。于。長。淮。也。在。けむ。然。人皇氏没。拒神  
次之。云。前條は結文なる。准。を。思。ふ。次條ある

黄神次之云云。其文は、もて拒神氏没黄神次之。之在王し文  
此上四字誤失せり。下四字を錯亂し残せし者好し。此もか  
錯亂を訂し。借かく文理字考訂をれむ。其古文を決めて  
見て知るを訂し。借かく文理字考訂をれむ。其古文を決めて  
拒神氏出子長淮。駕六蜚羊。政三百歳。拒神氏没黄神次之。五  
葉千五百歳。之在けむ。然て五葉之ハ。五末葉と云ふか如  
く。次は黄神より柏皇まで五氏也。拒神氏末葉之由也。  
其五氏在治せる歴數。総て千五百歳の間ありけし義也。  
王。此事委くハ。第十二條。少て路史。彼丹壺記。因りて。人  
皇氏次了。五龍氏云ふ世字立て。其次了。循蜚紀也。鉅  
靈。句彊。譙明。涿光。鈞陳。黄神。拒神。之叙あり。斯て其

拒神氏傳也。此本文字。其後採れる。間あり數氏を  
加。人皇氏没拒神次之。と云ふ文字存せるは何ぞや。若  
實其間。然ば。王王者。有むるは。人皇氏没して拒  
神也。此次之は云。是れ小非也。

七  
黄神氏或曰黄妹。黄頭大腹。出天齊。政則有官統。三百四十歳。拒  
神次之。號曰黄神。一日有人黄頭大腹。出天齊。政三百四歳。黄神  
次之。號曰皇神。出淮。駕六蜚羊。政三百歳。五葉千五百歳。神皇氏  
駕六蜚龍。化三百歳。

此條は。初免唯一行也。黄神氏の本文也。拒神と云ふ王  
以下は。前條。此條。次民也。條。柏皇の條。総て四條は。錯亂衍文

なり。其を先一。拒神次之。此四字は。前條より人皇氏没拒神  
次之。と有る文は。衍あり。二。號曰。黃神の四字は。此黃神の  
條より。或曰。黃神と有る。神字誤りて。錯乱せしあり。然。羅  
泌此義を悟らば。拒神次之。號曰。黃神。此八字を。前條ある拒  
神氏の。三百四十歳と有る。連書し。且。此拒神次之。と云  
ふ。文は。依て。拒神氏を黃神氏の。次に出せる。甚し。此誤  
り。而して。號曰。黃神。と云る。文をも。連書せし。黃神と云は。  
拒神氏を。出せる。何ぞ。其事をも。抑。此の本。文は。取りて。  
黃神氏を。出せる。は。丹壺記。と云ふ。物。黃神拒神。三。一。曰。有人黃  
と叙ふる。偽妄。惑。子。故。其。三。一。曰。有人黃  
頭大腹。出。天齊。此十一字は。即。本條。一説。して。有人。云。此  
のみを。異。四。政。三百四歳の五字を。次。なる。次。民氏。此  
文の。錯乱。あり。前。一。曰。云。連。此。文。黄神  
氏の。政。三百四十歳。と有る。十の字。脱。錯

然。活。然。其。思。熟。思。五。黃神次之の  
四字を。前條。政。三百歳。と云。下。在。此。文。錯乱あり。  
此。由。既。上。云。皇。六。號。曰。皇神の四字は。上。錯文  
り。號。曰。黃神。と有る。再。誤。衍。文。皇。其。皇。黃。は  
くも。黃帝。を。皇。帝。と。皇。三。皇。を。三。黃。七。出。淮。駕。六。蜚。羊。政  
と。作。る。類。ひ。今。數。ある。暇。非。文。あり。七。出。淮。駕。六。蜚。羊。政  
三百歳。五。葉。千。五。百。歳。の。十六。字。は。前。條。拒。神。此。文。の。錯。乱。の  
る。あ。言。ふ。を。更。なり。八。神。皇。氏。駕。六。蜚。龍。化。三。百。歳。と。有  
る。神。字。を。拍。字。に。誤。写。す。此。十一。字。を。柏。皇。氏。此。條。に。錯。乱  
なり。此。は。あ。其。條。論。ふ。字。俟。羅。泌。此。義。を。得。悟。ら。ば。  
る。神。氏。也。云。もの。文。一。曰。神。皇。氏。駕。六。蜚。鹿。政。三。百。歳  
と記して。春秋。余。歷。叙。也。標。せ。る。は。實。尔。牽。強。誣。會。と。云。誤。し。  
〇  
二二七

右此錯乱行文。す於如此訂し代は至。然て立却り  
て。初免此一行字思ふ。或曰黄妹也。或字は下此條  
此文例字思ふ。號を誤れるなり。然れど此を或字ありも。  
出天齊也。有依。辰放氏は條。出地郭とある代。宋均注。  
地名也と云ふ。相發して思ふは。是も地名あり。出天齊政  
之熟世。依非。政を疑はく。統三世間。在し字は錯乱世  
依なり。其も上も下も。政幾百歳と有依。相發して辨  
ふ。羅泌此義を悟らば。斯て此條も上は  
例り據る。末尔次民次之と云文有至。其古文を決りて。  
黄神氏號曰黄妹。黄頭大腹。出天齊。則有官統。政三百四十歳。

八

黄神氏没。次民次之。とぞ在けむ。然て路鬼。拒神は。此黄神  
此次小出。世依は。謬れること。既小辨ふ依如あり。其次。黎  
靈。大醜。鬼醜。弁茲。秦逢。冉相。蓋盈。大鼓。雲陽。巫常。秦壹。空桑。神  
民。倚帝。と云ふ。十四氏は傳を作至。其次。次民氏。出せ  
依え。例は丹壺の惑なり。  
次民氏是為。次是氏。次是氏没。元皇出。天地易命。以地紀。穴處之  
世終矣。  
此條り缺文あり。其は第六條小。五葉千五百歳と有依。拒  
神は次なり。黄神なり。柏皇。至依。五葉は歳を総する數れ  
ること。彼條り云依如。如。其五氏の歳數各小整はて

は有<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>じき事<sup>レ</sup>なる<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>黄神辰放離光三氏の歳数は有<sup>レ</sup>れど  
此條の次民と第十一條は柏皇<sup>ノ</sup>尔歳數を記<sup>ス</sup>。甚<sup>ク</sup>不審<sup>シ</sup>  
を恒<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>安<sup>ム</sup>ら<sup>レ</sup>代<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>ら<sup>ル</sup>。前<sup>ニ</sup>第七條を右<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>考訂  
せ<sup>シ</sup>加<sup>テ</sup>。柏皇<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>の歳數は所<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>る<sup>カ</sup>。唯<sup>ニ</sup>次民<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>の歳數は  
之<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>る<sup>カ</sup>を彼<sup>レ</sup>錯文<sup>ト</sup>を<sup>レ</sup>我<sup>レ</sup>悉<sup>ク</sup>そ<sup>レ</sup>此條<sup>ノ</sup>小配屬<sup>セ</sup>る<sup>レ</sup>殘<sup>ヲ</sup>を視  
れ<sup>ド</sup>。政三百四歳の五字<sup>ヲ</sup>み<sup>テ</sup>餘<sup>五</sup>。何處<sup>ノ</sup>の錯文<sup>ナル</sup>も非  
也。又<sup>ニ</sup>誤文<sup>ナル</sup>も見<sup>エ</sup>れ<sup>ド</sup>。是<sup>レ</sup>若<sup>ク</sup>は次民<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>の歳數の錯<sup>ト</sup>乱  
非<sup>シ</sup>じ<sup>ウ</sup>也<sup>ト</sup>思<sup>ヒ</sup>得<sup>テ</sup>。其<sup>レ</sup>五字<sup>ヲ</sup>を此條<sup>ニ</sup>補<sup>ヒ</sup>て。其<sup>レ</sup>年數<sup>ヲ</sup>推  
檢<sup>ス</sup>。五葉千五百歳<sup>也</sup>有<sup>ル</sup>。五十四年餘<sup>レ</sup>也。然<sup>レ</sup>も其<sup>レ</sup>  
を五<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>の在<sup>セ</sup>し<sup>ケ</sup>る<sup>レ</sup>大數<sup>ノ</sup>の傳<sup>ス</sup>る<sup>カ</sup>。實<sup>ニ</sup>伏羲<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>の世<sup>ニ</sup>

で<sup>レ</sup>小係<sup>五</sup>。盤古<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>以來<sup>ニ</sup>紀元<sup>ノ</sup>年數<sup>ハ</sup>正<sup>ニ</sup>整<sup>ニ</sup>符合<sup>セ</sup>る<sup>カ</sup>。第  
十二條<sup>ノ</sup>尔記<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>る<sup>ハ</sup>。最<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>思議<sup>ノ</sup>事<sup>也</sup>。抑<sup>シ</sup>  
路<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>し<sup>レ</sup>上古<sup>ノ</sup>の歴數<sup>ナル</sup>も。成童<sup>ノ</sup>頃<sup>ニ</sup>疑<sup>ハ</sup>る<sup>カ</sup>。有<sup>リ</sup>て<sup>レ</sup>往<sup>シ</sup>  
文<sup>政</sup>十年<sup>ノ</sup>の頃<sup>ニ</sup>西蕃<sup>ノ</sup>太古<sup>ノ</sup>傳<sup>ヲ</sup>を著<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>疑<sup>ハ</sup>る<sup>カ</sup>。殊<sup>ニ</sup>意<sup>ヲ</sup>  
用<sup>ヒ</sup>て<sup>レ</sup>伏羲<sup>ノ</sup>以來<sup>ニ</sup>年<sup>ノ</sup>歴<sup>ヲ</sup>更<sup>ニ</sup>形<sup>シ</sup>。其<sup>レ</sup>以前<sup>ノ</sup>の歳數<sup>ヲ</sup>且<sup>ニ</sup>は  
思<sup>ヒ</sup>得<sup>テ</sup>在<sup>リ</sup>し<sup>カ</sup>。次<sup>ニ</sup>柏皇<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>の歳數<sup>ヲ</sup>缺<sup>ク</sup>ぬ<sup>ル</sup>。其<sup>レ</sup>正  
數<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>整<sup>ニ</sup>ふ<sup>カ</sup>。初<sup>ニ</sup>忽<sup>ニ</sup>然<sup>ニ</sup>古<sup>ノ</sup>史<sup>ノ</sup>の年<sup>ノ</sup>曆<sup>ヲ</sup>編<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>作<sup>ル</sup>。思<sup>ヒ</sup>ふ<sup>カ</sup>  
い<sup>テ</sup>來<sup>ル</sup>物<sup>ヲ</sup>し<sup>ル</sup>。時<sup>ニ</sup>も神<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>開<sup>キ</sup>て<sup>レ</sup>前<sup>ノ</sup>條<sup>ノ</sup>の錯<sup>ト</sup>乱<sup>ヲ</sup>  
訂<sup>正</sup>す<sup>カ</sup>。物<sup>ヲ</sup>し<sup>ル</sup>。思<sup>ヒ</sup>付<sup>テ</sup>考<sup>究</sup>せ<sup>ル</sup>。其<sup>レ</sup>二<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>の歳數<sup>ヲ</sup>も右  
如<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>る<sup>ハ</sup>。然<sup>レ</sup>も有<sup>ル</sup>。其<sup>レ</sup>月<sup>ヲ</sup>立<sup>テ</sup>七<sup>ノ</sup>日<sup>ヲ</sup>云<sup>フ</sup>。如<sup>ク</sup>奇<sup>ニ</sup>異<sup>ニ</sup>  
か<sup>ル</sup>事<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>も心<sup>ヲ</sup>懸<sup>ク</sup>ら<sup>レ</sup>む<sup>カ</sup>。己<sup>ノ</sup>か<sup>ル</sup>思<sup>ヒ</sup>ふ<sup>カ</sup>。如<sup>ク</sup>奇<sup>ニ</sup>異<sup>ニ</sup>  
魯<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>も錯<sup>ト</sup>乱<sup>ヲ</sup>。傳<sup>ス</sup>る<sup>カ</sup>。我<sup>レ</sup>が心<sup>ヲ</sup>開<sup>キ</sup>け<sup>ル</sup>。事<sup>ヲ</sup>と<sup>レ</sup>思<sup>ヒ</sup>ふ<sup>カ</sup>  
又<sup>ニ</sup>近<sup>ニ</sup>交<sup>ニ</sup>間<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>く<sup>レ</sup>傳<sup>ス</sup>る<sup>カ</sup>。我<sup>レ</sup>が心<sup>ヲ</sup>開<sup>キ</sup>け<sup>ル</sup>。事<sup>ヲ</sup>と<sup>レ</sup>思<sup>ヒ</sup>ふ<sup>カ</sup>  
愉快<sup>ナル</sup>も奇<sup>ニ</sup>也<sup>ト</sup>。辱<sup>シ</sup>る<sup>カ</sup>。云<sup>フ</sup>。吾<sup>レ</sup>が神<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>の年<sup>ヲ</sup>然<sup>レ</sup>も次<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>氏<sup>ノ</sup>没<sup>ス</sup>  
歴<sup>ヲ</sup>も昔<sup>ノ</sup>明<sup>ニ</sup>也<sup>ト</sup>。基<sup>ニ</sup>也<sup>ト</sup>。爲<sup>レ</sup>れ<sup>ル</sup>。然<sup>レ</sup>も次<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>氏<sup>ノ</sup>没<sup>ス</sup>

〇  
三十九

云、より。以地紀と云、はて十四字を。初發子引、多る摘六辟、  
易歷曰、次是氏没六皇出、天地命易、以第絶、有、有、同文、  
るが。宋均注、六皇、此下、人數者也。と云、るは然、  
分り下、辰放、離光、柏皇、伏羲、神農、黃帝、此六氏、指せり。然  
此を。此、本文、元皇と有るを。六皇の誤写、  
古、次、民、氏、の、傳、を、取、り、て、載、せ、る、も、元、皇、出、と、有、れ、  
見、る、誤、字、と、有、り、  
世、の、既、  
命、と、あ、  
は、  
地

九

絶を誤写、  
は、天、紀、  
十二、  
思、  
辨、  
古、文、  
皇、出、  
了、此、  
云、  
辰、放、  
地、  
而、  
日、  
上、  
下、  
天、  
地、  
與、  
神、  
合、  
謀、  
古、  
初、  
之、  
人、  
亦、  
服

蔽體。次民氏沒。辰放氏作時多。陰風乃教民擗木茹皮以禦風霜。  
注云茹蘊也茹毛蘊被其毛 絢髮閭首以去靈雨而人從之。命之曰衣皮之人。

彼摘六辟尔。辰放木頭四乳號曰皇次。屈出地教駕六飛麟從。

日月治二百五十歲と有協此條の畧文あり。今本本文を古微書小出

せる尔は其注を漏せり。今は摘六辟の文也。路史又引ある文は注をとりて加す。 以て辰放氏は歲

數は摘六辟了。二百五十歲とある。二と三は誤写ある。次條

尔。帝辰放在位三百五十年。離光次之也。有協正ければ此

を採り。上は文例の依りて。衣皮之人と云ふ下は。政三百五

十歲辰放氏沒。離光次之也。十四字を補ふ。易歷は古

文は決めて然るを在けり。遺れり靈雨とある靈を決り零は誤写擗を疑ある擗は俗

字れ協し。然て路史は是辰放氏字。因提紀は初として離  
所思る也 然て路史は是辰放氏字。因提紀は初として離  
光氏をて其間尔。蜀山。逐魄。渾沌。東戸。と云ふ四氏を出せれ  
ど。例の丹壺は妄誕ありかし。

十

帝辰放在位三百五十年。離光次之。號曰皇談。銳頭日角。駕六鳳  
皇出地衡。治二百六十歲。

此條は離光次之と云ふは十四字は。そを前條は結文形依

る。此條の首文を失ふは故り。此は接續せりと見ゆ。そは帝

云ひ在位と云るも前後此文。政若干歳と云るも 然らば此條

治若干歳と云る例。違ふも思ふ也 然らば此條

首文を何れ有らむと云ふ。是も前後此文例を思ふ。離  
號字は上了。離光氏は此四字ありて。其古文は決りて離



光氏は號曰皇談銳頭日角駕六鳳皇出地衡治二百六十歲  
 離光氏沒柏皇次之也路史此在皇覃氏と作多  
 る也丹壺記に依りしなり  
 然して本傳を命歷序を取れる其文の銳を允駕を格と作  
 り六十を五十と作して注に命歷序云次民氏沒離光次之  
 號曰皇談治二百五十歲也然て路史の此次の啓統吉夷凡  
 有協也信られ恩本なり  
 遽狝韋有巢遂人庸成と云ふ七氏の傳を作し出して右曰  
 提紀凡六十有六世と云ふ也又例に丹壺の據れる説あり  
 元より取協不足らむ  
 柏皇氏は爲皇伯登出搏桑日之陽駕六龍而上下以木紀德  
 此條亦も落文あり其も第七條なる神皇氏駕六蜚龍化三  
 百歲也有協神も柏字は誤字なり此條の錯文なるあり既

小云ふか如し然て日之陽と云ふこと語字成さば甚讀み  
 取文なるを熟く考ふる河圖括地象も淮南子も世界  
 の大九州の事を云ふ文あり正東陽州曰申土とありて陽州  
 とを扶桑州の事あり然れども今文に日は日を誤り州を落  
 せぬありて曰之陽州と有るし注文の本文小入るあり如  
 此考定むれば易歷の古文は決て柏皇氏は爲皇伯登  
 出搏桑陽州駕六蜚龍而上下以木紀德化三百歲柏皇氏沒  
 伏羲次之と有けむ路史此本文小此文を採れるなり然て  
 登桑の二字を省けるも非なり  
 路史の禪通紀也て是前より史皇氏と云ふ字出し次は柏皇  
 中皇大庭栗陸昆連軒轅赫蘇葛天尊盧祝誦昊英朱襄陰康

無懷有巢の十六氏を出して。次ハ太昊紀を出せり。此は例  
此丹壺記ハ據れる事ハ多ク。因リ云ハ諸書リ驪連赫昏祝  
融ト有る代、昆連赫夔祝誦ト  
書るも丹壺の奸史皇とは倉頡ハ事ハ多ク。此ハ黄帝此史臣  
を信ぜしあり。鳥迹篆を作れる人ハ多ク。諸書ハ所見多ク如ル  
多ク。史皇ハ稱ハ皇字々リ誣會して。王者此列ハ加多ク物  
形至然。禹子羅泌是妄を信じて。其傳ハ河圖玉版の倉頡為。  
帝南巡狩登陽虛山臨于玄扈洛汭之水。靈龜負書丹甲青文。  
以授之。帝文止二十八字。景刻于陽虛之石室也。此文ハ  
引多ク古微書ハ出セ授字々リ上字取り。倉頡為帝ト句  
ハ多クを校合して引多ク。帝謂倉頡ト其證ハ為ハ最陋シ。そハ南巡狩ト  
して。

云々以下伐熟ク見るハ尚書中候ハ黄帝巡洛龜書赤文成字  
以授軒轅。春秋演孔圖ハ黄帝坐玄扈洛水上。與大司馬容光等  
臨觀鳳皇銜圖置黄帝前。再拜受圖。宋均注。玄扈石室名也。ト  
有ハ也類説ハ黄帝事實ハ此ハ疑ハク為帝此間ハ脱文ハ  
ハ也。帝トハ即黄帝ハ也。倉頡ハ何ト也著明あり。叙帝王之相云。倉頡  
四目。顓帝戴干云。ハ云ハ文を引テ不及人臣也。倉頡既王ト云ハ此ハ演孔  
圖の列ハ餘の人臣ハ是ハ偶然ハ事ハ多ク有ル。元命苞ハ此事を載  
多クハ也。人臣ハ后稷も入多クハ也。此ハ元命苞ハ此事を載  
揚升奄外集ハ羅泌路史以軒轅ト黄帝非是一帝。史皇ト蒼  
頡乃一君一臣。蓋洪荒之世存之。而論ハ也。柏皇氏々リ下。十  
可也ト云ハ其辨ハ何トヤ。五氏ハ次序ハ既ハ也云。如ク本據あり。其ハ六韜ハ昔柏  
皇氏。栗陸氏。驪連氏。軒轅氏。赫昏氏。尊盧氏。祝融氏。此古之五

○

者也。未使民化。未賞民。民勸。此皆古之善為政者也。至於伏羲氏。神農氏。教化而不誅。と見え。此文今本小缺。今は平津館叢書小出せる。六韜逸文を引くる。引くる。劉恕の外紀。此。莊子胠篋篇。昔者容成氏。大庭氏。伯皇氏。中央氏。栗陸氏。驪畜氏。軒轅氏。赫胥氏。牟盧氏。祝融氏。伏羲氏。神農氏。當是時也。民結繩而用之。とあり。金樓子。此。同じ文。出する。軒轅氏。然れを此。二書氏。其名。驪畜氏。と。驪連氏。ある。然れを此。二書此諸氏也。下。引く。開山圖。諸氏。と。取捨して十五氏。と定め。此。伏羲以前の諸氏。と。為。と。事。は。史記。封禪書。小。管仲曰。古者封泰山。禪梁父者。七十二家。而夷吾所記者。十有二焉。昔無懷氏封泰山。禪云云。息羲氏封泰山。禪云云。神農氏

封泰山。禪云云。と有。あ。と。小據れる物。然。泰山云云。と。十有二。は。是。より。次。く。炎帝。黃帝。顓頊。帝。堯。舜。禹。湯。周。成王。を。出。せ。り。七。十。二。家。と。云。ふ。か。中。無。懷。氏。より。周。成。王。まで。十。二。王。封。禪。を。記。え。ぬ。れ。ど。無。懷。以。前。六。十。家。名。を。記。え。ぬ。と。云。ふ。は。此。を。管。子。封。禪。篇。に。文。あり。し。を。聞。ゆ。る。が。今。本。に。此。篇。を。缺。し。然。れ。ど。後。人。史。記。より。取。り。て。補。す。る。は。り。し。て。封。禪。書。に。注。し。無。懷。氏。古。之。王。者。在。伏。羲。前。見。莊。子。と。有。れ。ど。莊。子。小。此。氏。名。を。こ。と。上。引。出。る。が。如。し。彼。補。史。記。も。右。此。諸。書。及。之。帝。王。世。紀。亦。據。多。し。と。見。え。て。自。人。皇。已。後。有。五。龍。氏。燧。人。氏。大。庭。氏。柏。皇。氏。中。央。氏。卷。須。氏。栗。陸。氏。驪。連。氏。赫。胥。氏。尊。盧。氏。渾。沌。氏。昊。英。氏。有。巢。氏。朱。襄。氏。葛。天。氏。陰。康。氏。無。懷。氏。斯。蓋。三。皇。已。來。有。天。下。者。之。號。而。韓。詩。以。為。自。古。封。太。山。禪。梁。甫。者。萬。有。餘。家。

仲尼觀之不能盡識云々記して其自注に皇甫謐以為大  
庭氏己下皆襲伏羲之號難可依從按古封太山者首有無懷  
氏乃在太昊氏之前豈得如謐所說と云王皇甫謐が所說と  
說あり其初學記に帝王世紀曰女媧氏没次有大庭氏柏  
皇氏中央氏栗陸氏驪連氏赫昏氏等盧氏混沌氏有巢氏朱  
襄氏葛天氏陰康氏無懷氏凡十五世皆襲庖犧之號と有  
る知履し斯て皇甫謐が凡十五世と云るも庖犧女媧と  
有十五世の意あり補史記に諸氏以下の名及び其後序に世  
紀を取らぬ大庭氏以下の名及び其後序に世  
紀を取らぬが中庖犧女媧は是より後と為る故に卷  
須氏吳英氏と云ふ二氏を加れて十五世と為るは吳英氏  
と云ふ名を開山圖に見られと卷須氏と云ふ名を前後  
より引出る書等も出さる名あり何れも據りて此より加  
ふべき事あり然るる皇甫謐が太庭氏以下伏羲より後と  
云ふ說も本據あは事あり其は遁甲開山圖に女媧氏没大

庭氏王有天下次有柏皇氏中央氏栗陸氏驪連氏赫昏氏尊  
盧氏祝融氏混沌氏吳英氏有巢氏葛天氏陰康氏朱襄氏無  
懷氏凡十五代皆襲庖犧之號と有は子據れる說あり遁甲  
圖に全書を今傳はらば此文は說部小引より再引たる  
あり漢書に古今人表に伏羲氏の後神農氏の前女媧氏共  
工氏容成氏大庭氏柏皇氏中央氏栗陸氏驪連氏赫昏氏尊  
盧氏渾沌氏吳英氏有巢氏朱襄氏葛天氏陰康氏七懷氏東  
扈氏帝鴻氏と有は子據れる說あり然らば此等諸氏  
錯れり說に見ゆを論じ及ばは文  
子伏羲氏は前と云ふ後と云ふは兩說此中孰り正說れる  
と言ふ右諸書此中小有巢氏とは辰放氏は異號燧人氏  
と云ふ伏羲氏は異號大庭氏とは神農の號軒轅氏とは黃帝  
の號なるを各別氏に傳り訛りしなり然るを路史に  
此有巢燧人大庭

軒轅れど辰放伏羲神農黃帝とは別れり氏を爲す俗  
說訛傳多し聚めて附會れ説を成多ゆを彼謂ゆ丹壺  
記惑る故非事なり然れ右は四氏を除きて其餘  
諸氏は王者非之柏皇氏は當昔より次く其號を襲  
れ稱れる諸侯は類れり者あり伏羲の世も更なり其後  
も名は聞えし故六韜莊子管子開山回史記世紀を始  
其餘の諸書も伏羲は前とも後とも言むる皆王者と  
しす思ひ訛れる物なり天皇氏以降黃帝以往は問り此  
諸氏は王位居て世は無き也上下の論ふ如れ也  
右は訛説ぞは一切に掃除し畢ゆき事あり然れど右  
實は其世も諸侯とある在りは事は違ふ無れを此  
外にも諸書を拾ひ出で太古傳の説著せるは見ゆべし

はて補史記に引ぬる韓詩外傳も萬有餘家は王者は在り  
依趣に謂するも例は荒唐固より論ぬる足らぬ管子より七  
十二家と有るも此書管仲の自記も非ずは上りある百  
足らぬ五十も多く餘る代云ふ大數は常語なり實數なり  
秘を本據は爲難りれ也夷吾所記者十有二と云ふは  
少く誓ふ所あり非之總て封禪も革命は王者ごとの  
然も非は至し也聞えて此十有二中周武王此名ありて  
成王は名ありし也黃帝は次り必す少昊氏ありて其名  
起り神農の名はあがり少昊氏は炎帝と有るは是神農の  
別名猶小封禪せるも一世は二代は封禪なり然れ此  
吾が記えし十有二家も伏羲氏は直に無懷氏なり成

○

思ふ。此は疑はく同氏は異號とならむ。然亦柏皇氏也。  
 伏羲氏は隱没せる後亦て在世して其功業を佐けし趣は  
 此は是より始めて封禪の名を傳はむ所思れむに也。其  
 は封禪すれば必山石を彫著し事取る。柏皇氏亦  
 くて無懷氏は名有るを以て知り辨ふ也。  
此は既く孝經援  
 神契封禪泰山考  
 績燔禪于梁父刻石紀號示典功と見え路史此餘論又書之叙曰伏羲氏王  
 天下造書契以代結繩之改由是文籍生焉是則書契之興出於羲氏  
 不疑者無懷氏固已封泰山昭姓紀號播之山石其書略已見於尉律則然  
 是伏羲之有書契為不迂也曷得謂至黃帝始有書契乎云云るか如し  
 其七十二家と傳はしむ。固より古記妄誕な。夷吾が記之  
 し十有二家を元より諦しき。封禪は正數ある也。然ては  
 遁甲開山圖に依りて彼十五氏の中柏皇無懷は二名字

出せる。世紀補史記及び此二書は名叙に従ふ。諸史編年  
 此類ある書等みれば考證は鹿漏に有る也。  
按此は就て  
 子金樓子に柏皇ありて無懷は同  
 氏なる事は知りて省ける傳はも有る也  
 始は木徳と稱して其より次く離光氏亦至はる。其徳  
 を稱せ文。柏皇氏亦至はる。搏桑より登出せり云云。以木  
 紀徳と云ふる也。是より准る。天皇氏は本居を搏桑なるが  
 其州より彼處に渡れる故也。木徳と稱せ伏羲を著せる  
 なり。斯く地皇氏の下に興于熊耳龍門等山に有る也。扶桑  
 より渡りて其山等に出興せ由なり。海に人皇氏を暘谷  
 より出ぬ里に有る。其谷より扶桑の地に在り。そは山海東

荒經。及び淮南子地形訓。於て見えて知。是を蜀志  
於秦宓傳。三皇乘祗車出谷口。云傳あり。然るも其  
を蜀國の斜谷と云ふ。谷は事と爲る。説有るも非言なり  
こ也。其注。魏畧を引きて論入る。如く天皇氏を無  
外之山より出たり。説あり。鄭玄説。無外山在崑崙之  
東南也。云崑崙崑崙は河回括地象。北極直下。在崑崙  
山なり。是に依りて其無外山の方位を思ふ。是を扶桑域  
内名山名形と云ふ。考然り。此等の事ども既り太古傳と  
扶桑國考と云ふ。委曲は考證せられ。今更  
小委くは云は。唯其大畧を云ふなり。於て三皇と柏皇と  
扶桑暘谷の域なり。出る由字顯はして。其中間なり。拒  
神等此五氏。其徳を稱せらるは。前後此兩氏。亦准りて共  
又木徳ある義を令知する物なり。然れど或は出長淮と云  
ふ。或は出天齊。或は出地郭。亦云ふ。扶桑州より渡りて。

然る所。小出興せる義あり。考著し。そは六鳳皇小乗る  
と云ふ。六飛龍り駕次と云ふ。皆他邦より渡りて。其所  
は出興せる趣り。聞ゆる哉。思を合せ。於拒神の條。黃神  
なり。柏皇海と云ふ。五葉と云ふ。子孫の義なり。最末なり  
柏皇氏を搏桑と出さる。此也。平心し思を合せて。其父  
祖は本居也。暘王辨ふ。處きなり。斯ても仍旧習を存して  
亦是太古傳を見て。其宿深字洗ひ去る。如く諸氏は條り。校正し  
終りて後。往古の年歴を推考ふ。其開闢は歲やかて  
盤古氏は元年。尚書中候。天地開闢。甲子冬至。見え  
易緯乾鑿度。日甲子歲。甲寅。有極也。開闢は曆元を云ふ。

語ふ也。是元年甲寅を算起して其一世一万八千歳  
を推步す。三百甲寅下りて其末年を癸丑なり。但し開  
歴を論ふ。太昊の時創めて制する。干支を以て云ふ事  
を何ぞや思ふも有らざる也。此に有名の後を以て無名の古  
を語る常の例あり。斯て天地二皇は元年を右癸丑歳の次年  
なり。甲寅不當也。其偶世一万八千歳也。三百甲寅は間  
て癸丑終り。次其人皇氏の一世三千三百歳也。其元年を  
甲寅なり。五十五甲寅下りて癸丑終り。其次拒神氏の  
元年は甲寅なり。其一世三百歳也。五甲寅下りて癸丑  
終り。既上り引ふる後漢の歴史の文に命歴序有甲寅  
終り。元と云ふも天皇氏の條に歲起撰提と有る文の事  
なり。此歳を人皇以て元年を順推はる言ふも更  
なり。盤古氏の元年を逆推はるも過らば甲寅なり。其歳首

多甲子冬至は日始るを其日なり。次は六十甲子を  
以て除ひ下せむ。天皇氏十歳首及び人皇氏元年の歳  
首も甲子冬至に當り。拒神氏元年は其次黄神氏の元  
年也。歳首も己酉冬至の日に當り。其次黄神氏の元  
年も甲寅なり。其一世三百四十歳なり。五甲寅は四  
十年なり。癸丑終り。次は次民氏の元年を甲午なり。其  
一世三百四歳なり。五甲寅は四年なり。丁酉終り。其次  
辰放氏は元年は戊戌なり。其一世三百五十歳也。五戊戌  
は五十年なり。丁亥終り。次は離光氏は元年を戊子  
なり。其一世二百六十歳なり。四戊子は二十年なり。丁未終  
り。其次柏皇氏は元年は戊申なり。其一世三百歳也。五戊  
申なり。丁未終り。加て黄神氏元年の歳首冬至は甲  
子。次民氏元年の歳首冬至は己酉。辰

○



放氏元年此歲首冬至也酉離光氏元年の歲首冬至  
も壬戌柏皇氏元年の歲首冬至は丁未を當りたる  
此柏皇氏元年歷と太昊氏元年歷と此聯續する年時此議  
も次條り論ふに俟たし。

伏羲遂人始名物蟲鳥獸

孫穀此所注して按古三墳云伏羲遂人之子也因風而生  
故風姓易通卦驗云遂皇出握機矩表計實而其刻曰蒼牙通  
靈謂伏羲也故云遂人有傳教之臺伏羲立十二言之教而魏  
淳于俊亦以為伏羲因遂皇之因以制八卦則羅泌置遂人于  
因提紀中未知何據今云其據也丹壺記然亦云其物在  
羲父葬震山下世言伏羲無父其母感跡而生者妄也則三墳

以為遂人之子亦証依命伏羲後矣古学之難執音如  
是と云是は今の用ぬ文は省畧して引あり然亦伏羲氏也彼赤縣  
州の産也非也是も扶桑日域此神真也暫かしあり出  
興して其蠢民ら此君師也志て先師此謂也る馭戎せるれ  
り其も抱朴子の古説也壯牙大墮女媧地出とある壯牙も  
蒼牙も書て伏羲氏此事下引く拾遺記の説と  
或以て其大約を知る然也孫穀が言誠り理あり天  
を天降と云ふが如く地出を地皇氏を出龍門と内て今此  
云る類あり尚委く太古傳り論ふに見る隨  
本文を按するも伏羲遂人も有る也炎帝神農氏黃帝軒轅  
氏れど連称せると同例あり其創也と事也一人此如さ

○

之察也。立却りて思ふ。上は次民氏没六皇出也。有るは其次の辰放より。黄帝海での事なる。遂人をして別人形らむ。此處小出倉記由無れ。遂人と稱ふも。やがて伏羲氏此異號を有ける。抑遂人云ふ號も。諸書小謂ふ如く。始めて鑽燧して火を出し。國民小火食を教ふる故に稱する。然るに拾遺記の遂人かくて。伏羲氏の傳に。始變茹腥之食と見え。河圖緯に握矩記。おと挺佐輔也。伏羲禪于伯牛。鑽木作火とあり。又か古三墳に。伏羲犧牛治金成。自來たる所有。庖犧と云ふ號を。犧牲を養ひ。庖厨せは。りて聞えたり。其異號は。人氏とも云ふ。周秦以來訛

二氏を為來れる物なり。然るに秦漢已來緯書類。及び鄭玄束均等が注。おと白虎通。風俗通。おと代始め。伏羲遂人を別氏と為る。或は伏羲の前と云ひ。或は伏羲の後と云ふ。説きも。一切に掃除を去り。況てか三墳に。伏羲遂人論ふも。足らば。本易書。伏羲遂人氏の傳。おと種々此事をも記傳けむ。其を皆亡失して。僅に此數字に殘れるも。最惜な事あれ。柏皇氏の直次。小出倉傳説に殘れるは。金玉も勝れる。命歴序に賜物あり。然る有れど。是亦いさ遺憾ある事あり。然るは盤古三皇の歳數も更あり。拒神と。柏皇まで此歳數も。一世も漏落を傳はせ給ふ。伏

羲神農黃帝三世の歳數也。易歷なりし古説字失予亦甚  
も遺憾あり文や。故是歳數字他書不索むる也。列子揚朱篇  
云。太古至于今日。年數固不可勝紀。但伏羲已來。三十餘萬歲。  
賢愚好醜。成敗是非。無不消滅。但遲速之間。耳也。見え。編年類  
は諸書の春秋元命苞引れて。自伏羲至獲麟。凡二萬六百  
二十六年也。云ひ。易緯稽覽圖云。伏羲氏甲寅。至無懷氏。五萬  
七千八百八十二年。形ど見えり。此三説此中。列子形ど  
之聞ゆれ。次め二説。例は臆み出ぬる推術をもて。誣く  
る説形ど故。斯れ如交相違あり。其在替覽圖。是を未  
尔唐人代。從伏羲天元甲寅已來。至大唐貞元年乙亥。積二百  
七十六萬一千二百二十算。至元和元年三月。二百七十六萬一  
千二百三十一算。云。説を。伏羲氏の元年を乙亥。海。甲  
附録せるも。知るべき。

辰形ど云。亦説も有れ也。古書多きは。天元の初歳甲寅也。為  
り。然れども其甲寅を。その當時より幾甲寅を去れる古  
昔は甲寅ありと云。こと。知るべき便あり故。彼推法ども  
用ひて。然る荒唐形も。異説の多く出來し物あり。海。甚く  
理小識。太西日開闢。至伏羲元年甲辰。一千七百四十年。彼  
以一樹證之。安知此樹何年。生乎。とある。太西の説を云ふ  
足跡。伏羲至舜。一千二百三。然れども玄学の家。よく傳ふる  
典故。小は。早く古説は實年數を傳ふ故。之聞えて。宋は張君  
房が。天聖中小著せる。元氣論。其實數を出せり。此書。七  
其出ぬる。其の著せる年を云。初と。雲笈の自序。王欽  
若を故相と云。語あり。欽若は。天聖三年卒れる人。形ど  
其。如此云。伐以て。天。其文。自太無太古。至於是世。不可備  
聖中。撰定。免。於。天。

○

紀爰從伏羲迄于今日凡四千餘載。其中生死變化。裁成人倫。為君為臣。為父為子。興亡損益。進退成敗。前儒志之。後儒承之。結紛不可一時殫論也。有以四千餘載。其其實數。此上文上引。多引。多列子之文。甚。似。彼。揚。朱。傳。子。引。荒。唐。の。訛。説。ある。が。此。も。彼。真。宗。の。時。道。藏。の。撰。集。の。余。を。せ。り。れ。し。玄。籍。究。覽。の。張。君。房。の。其。古。經。の。見。出。多。る。年。數。を。宋。の。天。聖。年。に。合。せ。て。定。め。し。數。形。り。彼。此。の。道。藏。の。傳。子。の。説。の。有。れ。と。君。房。の。列。子。の。説。を。取。り。交。此。の。歲。數。を。用。む。し。事。は。正。し。本。據。有。り。む。と。云。ふ。も。更。然。る。は。天。聖。の。加。仁。宗。と。云。ひ。し。の。年。號。の。九。年。續。ける。が。其。九。年。は。辛。未。の。當。れ。り。故。是。天。聖。九。辛。未。年。の。歲。數。字。起。根。基。と。為。し。諸。書。に。伏。羲。の。元。年。代。甲。寅。と。有。る。は。據。り。て。亦。於。四。千。年。を。溯。上。算。へ。て。其。餘。載。の。甲。寅。を。求。む。る。

了。又三十八年上りて。凡てハ四千三十八年にして得り。張子の謂ゆる餘載也。即是三十八年なり。宋仁宗の天聖一條院の天皇の長元四年に當り。其年を今。然れども。此天保二年辛卯に至りて。八百一年の始なり。此甲寅ハ實は甲曆を作れる歳にして。其在治初年にも非也。然るも路史の三墳云。伏羲三十易草木而立。三十易草木。而河圖出。又二十二易草木。而造天書。後一易草木。作甲曆。歲起甲寅。是伏羲以甲寅歲生。庚申即位。與國家啓運之年合。斯萬載之一遇也。是書人或疑之。是說宜有自來。也。云。然る言。庚申此歳を。其馭戎の元年形る。路史の引。墳の文を。今本と合せ見る。今本も二。所の出。每る。此。三。の。例。に。説。の。多。る。故。中。を。り。真。文。と。思。は。る。限。を。据。ひ。

○



故其法もて之を正す。盤古氏の元年。日を甲子。歳を  
甲寅に開闢せり。柏皇氏に末年丁未。歳まで。四万一千百五  
十四年あり。此を天地人の紀法。千五百二十年を以て除  
あり。都て二十七紀にして人紀を終る。其の餘は百十四  
年あり。其初年を甲寅とす。其歳首冬至を甲子とす。是や  
かて太昊氏に曆を作せり。天紀上元の首歳あり。然るに此  
作曆の時。始て合朔の法を立ふる所以をもて。人天易  
命の法を用ひて。其元を八十年上と歸して。人紀を為す。  
此易命の事はしむ。今此所は其端緒を云むも。初学の輩は  
と容易に悟り得ず。事非ざるを別著述せる三曆由  
來記といふ物に精しく記す。然らば其柏皇氏に末年丁未。太  
昊氏に元年を以て之を正す。盤古氏の元年。日を甲子。歳を  
甲寅に開闢せり。柏皇氏に末年丁未。歳まで。四万一千百五  
十四年あり。此を天地人の紀法。千五百二十年を以て除  
あり。都て二十七紀にして人紀を終る。其の餘は百十四  
年あり。其初年を甲寅とす。其歳首冬至を甲子とす。是や  
かて太昊氏に曆を作せり。天紀上元の首歳あり。然るに此  
作曆の時。始て合朔の法を立ふる所以をもて。人天易  
命の法を用ひて。其元を八十年上と歸して。人紀を為す。

昊氏に馭戎に世に幾年に當りと言ふ。柏皇氏三百歳と云  
云子也。実を戊申と云ふ。百三十二年に在治あり。其翌年  
庚申歳也。太昊氏天隨せし。かを君位を避けて相位  
に居り。其大造の功績を補助して。太昊氏に隱身をり  
却りて後ろ没せり。其を下位に退る。百六十八年を當  
る年あり。是を以て拒神以下六氏の中。柏皇氏に名に  
す。太昊氏に後にも聞えり。斯く其隱没せぬ歳を丁未とす。  
馭戎せる間。此百三十二年と合せて三百年に在るが。  
是より紀元及び節炁の推法。みれ密合せり。豈亦愉快あり  
文也。盤古氏の一万余歳及び天地二皇此一万余歳も  
世界万国に在る在り。此を措きて人



太昊云しとあり。或は五行大義初学記三皇本紀より引く。百王先王云、禹を、按合して再引く。但し、継天を、帝易曰、炮犧氏王天下也、言心炮犧繼天而王、為百王先首、德始於木、故為帝太昊、作罔罟、以田漁、取犧牲、故天、下號曰、炮犧氏、と有る。本紀に説あり。然、此、文、傳、復、大、人、迹、と云、なり。庖犧代之と云、禹で二十六字は、曰、此、説、此、妄、誕、ある、字、皇甫謐、過、り、て、之、を、用、む、遂、に、文、飾、して、傳、ふ、し、説、ぬ、り、其、は、禹、故、燧、人、氏、没、庖、犧、代、之、と云ふ、事、此、説、に、由、を、上、り、辨、ぬ、を、此、は、措、て、雷、澤、の、大、人、迹、を、履、て、成、紀、の、生、王、と云ふ、説、は、山海經、に、郭、注、亦、也、河、圖、云、大、迹、在、雷、澤、華、昏、履、之、而、生、伏、羲、と有、れ、也、此、は、拾、遺、記、の、春、皇、者、庖、犧、之、別、號、所、都、之、國、有、華、昏、之、洲、神、母、遊、其、上、有、青、虹、繞、神、母、久

而方滅、即覺有娠、歷十二年而生庖犧、長頭脩目、龜齒龍唇、眉有白毫、鬚垂委地、以木德稱王、故曰春皇、位居東方、以合養蠢化、叶于木德、其明叡照於八區、是謂太昊、也、有、ゆ、を、正、説、ぬ、る、此、拾、遺、記、の、文、今、此、要、ある、事、の、代、甚、く、約、め、て、引、ぬ、れ、を、委、く、は、本、書、に、就、て、見、る、處、し、其、は、天、皇、と、稱、せ、柏、皇、に、至、る、諸、氏、の、東、方、博、桑、州、と、り、出、ぬ、所、也、木、德、と、稱、せ、ゆ、る、伏、羲、氏、代、も、木、德、に、王、と、言、ふ、其、樂、此、名、を、扶、桑、と、云、ひ、殊、に、始、め、て、風、姓、と、も、稱、せ、る、動、物、古、説、に、思、ひ、合、せ、る、所、知、ぬ、也、但、し、華、昏、之、州、亦、西、荒、に、在、る、州、也、名、と、し、通、鑑、外、紀、に、注、す、今、在、陝、西、西、安、府、藍、田、縣、と云、ふ、所、也、皆、非、あり、然、る、西、方、に、在、る、地、あり、む、は、此、位、居、東、方、と云、ふ、事、也、木、德、風、姓、と云、む、物、と、抑、は、此、等、の、説、と、も、太、古、傳、り、委、く、辨、ぬ、る、事、也、見、ぬ、し、抑、を、此、雷、澤、と云ふ、所、也、事、也、山海經、海、内、東、篇、に、雷、澤、中、有、雷



神龍身而人頭鼓其腹在吳西淮南子地形訓雷澤有神龍  
身人首鼓其腹而熙カクシ見之。山海廣注雷澤在濟陰城  
陽縣西北禹貢作雷夏周禮作盧維鄭玄作雷雍昔舜漁于雷  
澤即此地也。見之。物馬龍身而人頭鼓腹而遨遊問常伯常  
伯曰此雷神也天下有道則見也見之。成紀云地也補史記注自注。按  
天水在成紀縣云。見之。共小彼州內吳國の西辺在依  
地名なり伏羲を此等地方出ぬむ。位居東方也云  
初傳也。盈非。假令此。生所をば強ひて用ひむ。  
之稱し。風姓と稱す。盈非。因無水を。尤小。按此。妄説は。  
周易云。雷澤成紀。如と。説を。用む。難く。形む。其家物也。雷何。龍

ある哉。伏羲の東方をり出ぬる古説り誣會し。初説卦傳  
云。帝出于震。と云。依文を謬解せり。始海り。因云。云。帝出  
は。日の事也。此日。東也。出西。北北。隱云。依。帝  
て。を。云。依。語。形。其。全文を。見。て。炳。焉。事。形。周易  
震を。東。配。せる。故。漢。儒。り。謬。り。此。帝。を。伏羲。事。と  
て。蔡。邕。が。獨。断。也。伏羲。の。東。出。ぬ。り。云。事。を。帝。出。  
于。震。と。記。し。後。世。次。く。其。謬。を。受。て。帝王。世。紀。及。三。皇  
本。紀。也。右。引。く。文。の。如。く。記。せる。は。鹿。漏。形。る。事。形。り。  
春秋元命苞。周先。祖。后。稷。の。母。扶。桑。州。に。至。り。大  
人。の。跡。を。履。て。后。稷。を。娠。ぬ。る。故。周。を。木。徳。と。稱。せ。る。事。を  
も。取。合。せ。る。其。を。雷。澤。の。事。と。為。し。其。雷。神。の。子。形。る。故。其。  
神。也。肖。蛇。身。人。首。形。を。稟。り。人。は。思。を。寄。べ。く。作。五  
構。り。し。妄。誕。形。る。と。疑。れ。し。其。列。子。天。瑞。篇。云。古。人。の。異  
生。の。事。を。云。依。所。小。后。稷。生。于

巨跡伊尹生字空桑也云ひて伏羲字巨跡は生きたり云  
ざるも是故あり又山海經小曰く因の添多る成見る亦其雷神の因  
も有りて實此龍躡なるが唯首此人如し然らば伏羲  
代羲を其形ありむる豈神人としも云むや  
の容貌い々有しと云ふり列子文子を始免種く異説  
有れ也上ル出せる拾遺記傳る春秋合誠圖孝經援  
神契其餘の緯書と云ふる蒼帝之為人渠肩達掖山準日角  
蒼目珠衛駿毫翁巖望之廣視之專而長九尺有一寸如く有  
函字用ふ也蒼帝とはも中五行の風本は神此事也其  
を青帝と云蒼帝とも云ふ伏羲氏を扶  
桑州と出ある故あり函は蒼帝と稱し蒼牙と稱せり函は  
周姫昌を蒼精の君と云ふも其先祖を扶桑州と出あるが  
故なり此本末をも路史も伏羲の出處は一説を出し  
能く心得て在也生於仇夷道甲龍山曰云仇夷山太昊之治也即今仇池伏  
羲之生處也与彭城成紀皆西土知雷沢之説妄

也長於起城今秦治成紀縣と有れ也此は謂く函龍山圖を仇夷山  
太昊之治也と有函治てふ語は羲を知次して謬れる説あ  
り抑此治は世に知る間を云ふ治とは少く異にして既  
引ある関山圖を五龍治在五方と有函如く其神眞は幽  
在治する處と云ふは固より或は其神靈を崇祀する  
山とも云ふ語れること也名山記衆仙記如く所見る如  
くも其例い々多く其仇夷山は太昊の幽在治する山  
なる由なり然るに此を生處と為たるも杜撰と云ふ也  
総て路史此分注を男革註と有れ也實も羅泌が自注  
て其注を引書をも大抵其本文本據なるが其本書  
此文を解し謬る右の類を誣多る説や  
○ 數ふる暇非文心を著て辨ふ也  
伏羲氏は赤

縣州を隱没せし後、代りて久しく馭戎せる女媧氏子。其妹也。有妹也。婦妹の義也。是を共尔扶桑州より出ぬ。故る。木徳風姓と稱せり。然るに此容貌をも。蛇身人首と云る。説あるを。其妹と云ふを。女弟此事小思ひ成して。伏羲と同形り説字作れるを。固より論あるに足らぬ。後世史類也。同母妹と云ふ記せしむ。笑尔堪也。事ぞし。凡て此等此所より少くは端緒を論はす。前後考記せしむ。説と云ふ。其意の得か。其節は有む。物せるを。曾て此の意を益す。非也。其精説は總て太古傳ふ云ふれむ。其傳ふ就て視るを。扶桑國考をも合せ見て知ふ。故し。

有、神人名、而年、蒼色大眉、戴玉理。注云、日月清、有次序、故神應和也。 駕、六龍出地輔、號皇神農、始立地形、甄度四海、遠近山川林藪也。

所至東西九十萬里、南北八十二萬里。所為如此、其教如神農、植樹木、使民粒食、故天下號曰皇神農也。甄記地形、遠近山川林澤所至。

此條本書の號字は上りも。有神人の三字有れど。上文は行かれは削り去り。古微書なる。文曜鈞は女媧以下至神農七十二姓。と有る所の孫鼓説る。按譙周古史以為伏羲以次有

三姓。始至女媧。女媧之後。五十姓至神農。神農至炎帝。一百三十二姓。是不當身相接。譙周以神農炎帝為別人。非古義也。鄭玄六藝論云。燧人至伏羲。一百八十七氏。未知孰是。と有れど。此は皆訛説妄誕なり。其非いぞ分明な事。上は條く論ず。小准りて曉る。柳。此命歷序一部を訂正し。其善を擇

○

分て固く之を執る。断見よ有れど。何れ煩瑣ある事も無く。其是非の定め  
らる事を知るを孫設のみ非之。誰も其是非を辨得られぬ事也。措  
きあるも甚も云ふべき事なり。故是をもて已常。彼国人も自国此書  
を解する事なき。皇國人も甚く劣りて拙也。と云ふなり。其も孫設すく三墳  
以伏羲為遂人之子矣。鄭玄六藝論云。遂皇之後。歷六紀九十一代。至伏羲皇  
甫。謚世紀云。女媧氏亦風姓。伏羲之妹也。譙周古史考。則云。遂人。次有三姓。乃  
至伏羲。伏羲。次有三姓。始至女媧。鄭玄以大庭氏。是神農之別號。而譙周以  
神農炎帝。非一人。自神農至炎帝。一百三十三姓。羅泌路史。至以為軒轅之  
前。別有軒轅。而有巢之上。更有有巢。何上古之多。范冥也。夫帝王至貴。而隱  
泯。曾汨猶若此。況于後世。介里巷修名者。其孰為表。而傳之。使志施不  
朽哉。噫。難矣。難哉。とも云ひ。張和仲。千百年眼。も相類せる説あり。して知る所也。して次條。火帝號  
曰大庭氏とあり。神農を火帝と稱せし事は。人これ知れど。大  
庭氏も稱せし事を。知ざる人多し。其を近く補史記に  
始欠諸説あり。あを別人と為るが多故あり。此訛は皇甫謐の  
帝世紀に起れる事と所思なり。羅泌路史も此謬を受て。禪通紀に云ふ。別大庭氏

と出した。神農と異なる。はて神農は在治を。遁甲開山圖に女媧  
氏没大庭氏王と有は。是正説あれど。上云ふややく。女媧氏は伏羲  
は隱没せる後も。久しく在世に在る也。實ハ其婦なり。が  
故。古くは伏羲氏の在治に附して。別王を列する  
立内王し故。易歷止を伏羲の次。神農を出せる者あり。  
是字以て桓譚が新論に。神農氏。継宓義。而王天下。云々と  
は言なり。然れど。春秋運斗樞を始。補史記に。伏羲女媧。  
古傳比末論。予は我見。然て新論を。初字記に引く。伐再引るなり。して次條。論不  
如。黃帝神農共了少典氏の子あり。同母兄弟形るが上。黃帝を兄なり。然  
て神農氏その父兄を除きて。伏羲氏は後子承。如何と

云ふ。伏羲氏既也。会易以消長。八卦作。王に八節を  
 建分し。五行は更王を考定めて。帝王は五運を立し故也。木徳  
 ある伏羲の後也。火徳形る神農の受命あり。黄帝改土徳と云こ  
 形るが少典の徳も人知らず。然れど。是も土徳。金徳も有り。故に。木  
 尅土。金尅木。あつた。謂ふをりて。世に立ざりし。然るは。此時お初  
 草創の時也。慙慙此義を守り用ひて。ハ。然らば其五運と云こ  
 事成王難るべき。深き由緒に有れむなり。 然らば其五運と云こ  
 也。何れ由來せし事ぞと謂ふ。既論如く。天皇は更あり。太昊  
 も木徳と称せる事は。扶桑神州より出ぬる故也。孔子家語の  
 昔聞諸老聃。曰天有五行。木火土金水。分時化育以成萬物。其神謂  
 五帝。是即五行神也。彼謂ゆる五龍形るが。其所在。天に於てハ。五  
 帝。星也。五帝座あり。地に於てハ。大九州あり。五岳是あり。此事ハ  
 一身五條也。既云。尚委く。古之王者。易代改號。取法五行。  
 ハ。天柱五岳考ふ云。亦を見る處し。 古之王者。易代改號。取法五行。

更王相也。亦象其義。是以太皞配木。炎帝配火。黄帝配土。少皞配  
 金。顓頊配水。是五帝也。古説云。上此謂ゆる五行ハ。五帝也。象れるなり。  
 然るは。太皞。炎帝。黄帝。三皇と。少皞。顓頊。二帝也。  
 堯舜を加ふて五帝とし。黄帝。顓頊。帝。堯舜を五帝と爲るなり。  
 皆後人此私意あり。委くハ。太古傳り辨ふるを見る處し。太  
 皞氏其始之木。五行用事。先起於木。木。東方。萬物之初。皆出焉。是  
 故王者則之。木を東方に象物と爲こは。扶桑木の由縁也。而首以  
 之を。扶桑國考り。既委く説ふを見る處し。 而首以  
 木徳王天下。其次則以所生之行。轉相承也。と有めて。知。太  
 皞伏羲氏は。東方風木。神州より出て。其仁慈を施せる故也。木徳  
 と稱せるが。其次ある四氏も。所生は行を以て。其徳を稱せる由  
 也。所生之行也。生日也。干を云。なり。其を王子年拾遺記の  
 黄帝以戊子之日生。故以土徳稱王也。と有るをもて辨ふ處し。戊子  
 を本

書了戊己と作るも、同音多り誤写せる形なり。今を己が決新  
を以て改むる其を戊己といふ日無きをみ至古昔生日  
を以て徳と為ることある種く相證はるなり。此拾遺  
事にも有むと今志をらく此一を挙ぐるなり。是より前  
記は傳ふ。黃帝を戊子日了生れり有る。是より前  
の太昊氏を甲子元曆を作して歲月日時了。干支を配  
せしむる由る事なり。但し右を相生五運の大約あるが猶相  
克五運と云ふ説あり。其を三曆由來記は第十三條に論へる  
を見ゆし。

炎帝號曰大庭氏傳八世合五百二十歲黃帝一曰帝軒轅傳十  
世二千五百二十歲次曰帝宣曰少昊一曰金天氏則窮桑氏傳  
八世五百歲次曰顓頊則高陽氏傳二十世三百五十歲次是帝

即高辛氏傳十世四百歲

此條は易緯稽覽圖了。甲寅伏羲氏至無懷氏五萬七千八百  
八十二年。神農五百四十年。黃帝一千五百二十年。少昊四百  
年。顓頊五百年。帝嚳三百五十年。堯一百年。舜五十年。禹四百  
三十一年。殷四百九十六年。周八百六十七年。秦五十年。己上  
六萬三千六百一十二年と有る。此年數の伏羲を至秦は五  
三千百八十年あり。己上六萬三千六百一十二年は或算するに六萬  
年と云ふあり。四百二十六年是るを何れぞや。神農より帝  
嚳まで其年數と相似有る。今傍の圈點を施せる。四十六  
字は易歴は古説なり。此稽覽圖を取て世數歲數を  
挽入せしめ疑ふ。但し神農の五百四十年を五百二十  
年とあり。黃帝の一千五百二十年を

○

二千五百二十年と有るを誤字と見え、他書に今本文を引くは百四十年と云ふ、千五百二十年とあり、下を引く補史記は百三十年と有るも誤字あり、又四百百年と有るは五百歳とし、顛項は五百年を、三百五十歳とし、帝嘗て三百五十年と四百歳と有るを、意あは所為と見ゆれど、其總數を算ふは、孰も違ふとあり、是れ大庭氏也、炎帝神農氏は別號ゆる也、本文此如く、却前條にも論ず、如く、傳八世、合五百二十歳と云、これを挽入する也、神農氏は元年は、女媧氏の隠没せる癸酉比翌年甲戌なるが、是より百四十四年她在治あり、丁酉の歳を陟去せぬ也、路史に載せぬ如く、是より十一年間あり、己酉歳は、黄帝は即位あり、然るを神農の元年甲戌なり、黄帝より其間、わたり、百五十五年なる代や、然るは八

代合五百二十年と云、斯く補史記は、神農納奔水氏之女曰、亦誕妄なる也、聽説、為妃、生帝哀、哀生帝克、克生帝榆、罔凡八代、五百三十年、而軒轅氏興、兵也記して、按神農之後、凡八代事、見帝王世紀、及古史考、然古典凶、兵皆前聞、君子考、按古書、而為此説、豈至今、鑿空乎、此紀亦據以爲説、也、自注せり、此、自注は、畧文なり、有、偽を引く、司馬貞が見る古史考、世紀と云、神農の後、凡八代、五百三十年と記せられ、右四代、凡八代、無、其、此、自注、著明あり、其、史、八代、五百三十年、と書し、其、八代、名を索む、れ、得、右四代、の、有、故、右、如、記、補、史、記、其、終、取、右、自、注、所、知、也、但、今、の、史、序、を、五、百、二、十、年、と、有、る、代、補

史記又取れる文ふも五百三十年とあり二三のうち何り  
誤字あり下ふ出れ路史の自注引多味亦も八世五百四  
十年とあり此を廿卅卅の字残用むしを誤れるり  
後世の史家多く五百四十年と云ふを用ふ亦も其多年を  
嘉慶を然亦も是後又出來し史類の諸書了世紀小出多味  
由る。神農の後帝承帝臨帝明帝直帝來帝哀帝榆罔と  
云ふ七世の名を出して各く其在治の歲數を附し凡八  
代五百有餘年と云ふ數を合せぬ亦も妄誕極なり其を  
司馬負が見ある世紀古史考の如く。若是八世比名此有紀  
むる其四世の名を畧して神農生帝哀哀生帝克克生帝榆  
罔と奉て右に自注を下す物りは。實亦も司馬負以後の  
妄説あるが故に諸書  
と云ふ其七世の名を世紀に出さず或は帝臨帝承  
帝明帝直帝登帝哀帝榆罔と云ふ或は帝魁帝承帝明帝直

帝來帝哀帝榆罔とも或は帝承帝臨帝則帝百帝來帝哀帝  
榆罔も何れも色く亦異りて一定せ代其在治の歲數亦各  
く區分して何れを是とは然れむ八代五百有餘年此説を  
定む得ずも非ざりけむ然れむ八代五百有餘年此説を  
用むは古史考世紀補史記と云ふ今其挽文小欺りれし  
物亦て神農より榆罔に至る唯四代此説を正す所然るを  
路史比炎帝紀小帝柱帝慶甲帝臨帝承帝魁帝明帝直帝登  
帝居帝節莖帝克帝戲帝器帝參盧是曰榆罔也凡て十五代  
以名を奉て種く亦説を作ぬれと總て信られ文其た  
年比正紀年の合はを強ひて代數を多くせむ也斯て其自  
欲して鑿空闇索せる附會此説を見ゆれをあり  
注し古今通系系炎世在位之歷帝承六十年臨八十年明四  
十九年直四十五年來四十八年哀四十三年榆罔五十年



在位此年數、諸書小異。小司馬史記乃有魁無臨而通鑿  
外紀神農後為臨魁六十年帝承繼之帝承六年諸書不同世  
紀等不逾此。小司馬史記也。司馬負補史記云、遷、  
云、此也。上引、今本、通鑿外紀、劉恕、外紀、諸書、不、  
同、云、心、得、如、世、紀、等、不、逾、此、也、云、帝、王、世、紀、上、  
論、如、司、馬、貞、補、史、記、作、臨、魁、承、繼、之、世、紀、上、  
其、名、也、如、神、農、也、只、四、代、爾、臨、魁、承、繼、之、世、紀、上、  
泌、心、着、於、此、也、羅、夫、神、農、七、十、世、以、炎、黃、之、在、位、觀、之、  
不、下、數、百、千、年、而、余、歷、叙、等、類、以、為、八、世、五、百、四、十、年、此、所、以、  
致、傳、記、之、紛、且、以、炎、黃、為、世、皆、踰、百、載、其、子、孫、無、一、及、於、百、  
年、又、皆、上、下、於、四、五、十、年、間、知、其、難、據、也、云、皆、時、世、字、測、也、

紀年を推し、稽ふ事、カマカ 麓畧、オロソカ 故、非、説、ト 然、カ 也、  
微書、カ 按、路、史、因、提、紀、古、之、有、天、下、最、長、世、者、無、神、農、若、也、故、  
尸、子、曰、神、農、七、十、世、有、天、下、豈、每、世、賢、哉、牧、民、易、也、呂、覽、亦、以、  
神、農、七、十、世、有、天、下、而、書、傳、止、存、八、葉、何、哉、云、云、然、  
也、其、尸、子、呂、覽、の、文、共、カ 妄、誕、也、先、唱、也、有、カ 然、カ 是、  
國、語、也、晉、語、也、司、空、季、子、曰、昔、少、典、取、於、有、嬌、氏、生、黃、帝、炎、帝、  
黃、帝、以、姬、水、成、炎、帝、以、姜、水、成、韋、昭、云、姜、姬、水、名、也、成、 故、黃、帝、  
為、姬、炎、帝、為、姜、二、帝、用、師、以、相、濟、也、謂、所、生、長、以、成、功、也、 黃、帝、戰、於、阪、泉、是、也、異、  
德、之、故、也、也、見、元、賈、誼、新、書、也、黃、帝、者、炎、帝、之、兄、也、炎、帝、  
無、道、黃、帝、伐、之、涿、鹿、之、野、而、兼、其、地、天、下、乃、治、也、有、カ 先、カ 辨、  
也、新、書、也、文、史、記、の、評、林、了、引、也、有、カ 炎、帝、者、黃、帝、之、  
戰、涿、鹿、之、野、云、カ 也、同、父、母、弟、也、各、有、天、下、之、半、黃、帝、行、道、而、炎、帝、不、聽、故、  
也、異、形、也、意、を、異、こ、く、無、し、 其、カ 晉、語、也、炎、帝、為、姜、カ 云、カ 也、

ては文を。黄帝を。炎帝神農氏とは。同父母兄弟なる由より。  
新書の。黄帝者炎帝之兄也。と云。亦も其意なるが。二帝用師  
と云。より下は。先輩を謂へ。師如く。神農の曾孫榆罔が。炎帝  
の號を襲て在し。と。黄帝を師を用ひて。黄帝遂に榆罔を擠  
せ。依義あり。新書に。炎帝無道と云。より以下も同義なり。  
史記  
索隱し。此。國語の文を引て。然則炎帝亦。女典之子。炎黃二帝  
雖相承。帝王代紀。中間凡。隔八帝五百餘年。若以。少典。是其父。  
名。豈。黃帝。經。五百餘年。而始。代。炎帝。為。天子。子。何。其。年。之。長。也。  
按。秦。本。紀。云。大業。娶。少典。氏。而。生。柏翳。明。少典。是。國。号。非。人。名。  
也。黃帝。即。少典。氏。後。代。之。子。孫。而。稱。為。子。是。也。と云。るを。深く  
思はざる誤あり。其は。秦。本。紀。に。大業。娶。少典。氏。とあり。炎  
黃。其。父。あり。少典。の。未。裔。なる。少典。氏。は。て。少典。を。軒轅。本。紀。  
あり。人の。女。を。娶。れる。義。あり。を。や。注し。伏羲。生。少典。と。有。所。古。説。を。聞。え。黃。帝。を。炎。帝。の。兄。れ

る。其弟なる炎帝は。父兄を除れて。女媧氏は。次り王位し  
居あるは。前條に論する由緒あり。其即位を。女媧氏は。隱没  
せる癸酉の翌年。甲戌に歲れるが。百四十四年。在治する。  
丁酉に歲し。陟去せる。其。寿。も。百六十八。歲。なり。と。路史に  
載せむ。女媧氏の百七年。生きたり。然る。黃帝は。榆罔を  
伐り。即位せる。炎帝の。陟れる。より。十一年間あり。己酉  
に。歲。あり。が。百五年。在治する。癸巳に。歲。了。陟去せる。其  
寿は。三百。歲。あり。と。萬姓統譜に。載せる。が。如し。然れを。女媧  
氏は。八十六。年。生れて。炎帝。二十。一。歲。の。兄。なり。是を。以  
て。李。子。が。言。り。黃。帝。炎。帝。と。云。ふ。賈。誼。が。語。も。黃。帝。者。炎。帝。之  
兄。也。と。云。ふ。然る。故。軒。轅。本。紀。に。黃。帝。者。少。典。之。次。子。也。と

云ひ其注子典生神農及黃帝と云ひ。黄帝を次々せるを託れる傳形り。はて黄帝三百歳は  
事不就てい。古に論あり。其を大戴禮記五帝德篇に。宰我  
問於孔子曰。昔者予聞諸采伊言。黃帝三百歳。請問黃帝者人  
邪。抑非人邪。何以至於三百歳乎。補注云采伊人名也。孔子曰。夫黃帝尚  
矣。先生難言之。上古之事長者猶不能詳也。太史公曰。百宰我  
曰。上世之傳。隱微之說。卒業之辨。卒終也。業事也。閤昏忽之意。  
言荒忽不可明也。非君子之道也。則予之問也固矣。固陋也。孔子曰。黃帝  
少典之子也。生而民得其利。百年死而民畏其神。百年亡而民  
用其教。百年故曰。三百年。按帝王世紀黃帝在位百年而崩。子  
之世稱死於少昊受之。又百年而顓頊受之。於子  
孫之世稱亡。少昊有也。宰予采伊小聞。每言説は古傳あれど。

儒は學ふ宰予らが意を異みる。人邪非人邪と問けむ。元  
宜ふ事がら。孔子は答は臆説をて。信るり足らず。今古  
此儒者は臆説を甘心せける一人も有はじ。中に萬  
姓統譜の作者の之を此説り。従はさる也。誠り卓見を云ふ。萬  
荻生茂卿の云ふ。此説り。物は武内宿禰に三百餘歳を  
疑む。韓國を馭めむを為す。此臆度の間にあり。名は人を  
説き置く。韓國を馭めむを為す。此臆度の間にあり。名は人を  
神学先生らが神典形を神事實を釋く趣もはら是等は  
説を有る。少昊は上に云ふ如く。炎帝神農氏の陟年丁酉よ  
り。黃帝元年は己酉まで。僅に十一年は間に彼榆罔が治す  
あり。猶ほ是上帝克帝と云ふ。有れど神農の然は  
あり長に在り。問ふ。父祖を先立てぞ失はりむ。是も神農は後  
七十世と云ふ。尸子に呂覽にの説を更にあり。或は十五  
世といふ。或は八代と云ふ。れど皆妄ある事を知る。履き移り。黃

帝紀元年も諸書小異説多うれど。己酉と云ふ説も。軒轅本  
紀及分廣黃帝記に見えて。其廣黃帝記の末なる。唐王瑾  
が言ふ。自黃帝己酉歲至今大唐廣明二年辛丑歲計三千四  
百七十二年矣とあり。此いど正し説あり。軒轅本紀も何  
と云ふことぞ知らざり。其全書は宋真宗が先天紀の中の撰  
し。然れど其より遙く古昔此書なること。唐書比藝文  
志。王瑾が廣軒轅本紀三卷此目有り。今其下卷に廣黃  
帝記とて傳はる。其見ゆ。疑なく。右此軒轅本紀に廣  
物あり。海晉比葛洪の抱朴子。黃帝比履歷を云ふ。文大  
む。後軒轅本紀は相似とれ。其より以前此書ある事を疑  
ふ。其も是廣明二年辛丑歲と。五十七辛丑と。五十三年遡  
王算ふれむ。三千四百七十二年と。其干支は己酉あるが。  
是即黃帝紀元年と。一己酉上れむ。神農氏比世は係り。一

己酉下れむ。其子孫比世を減むる故。前後より一年も動か  
し得られぬ。元年なり。斯て大戴禮を始め諸書。百年比在  
治と有れど。彼本紀に在位百五年とある。是正説とて。其陟  
年を癸己形るが。是より後百九年比間を。其子帝鴻と。其玄  
孫帝魁と相代り。継て。百十年比當る癸未比歲。少昊金天  
氏即位せり。然るは本文より。黃帝傳十世。二千五百二十歳と  
有るは。少昊氏まで此間を云ふ。此歳數あるが。此  
故妄説と云ふあり。少昊氏は。前漢の歷志を始め諸  
書に。黃帝比子と有れど。實も孫と。在位八十有四載。落年  
百有一歳。形ること。路史の攷子記せる如く。て。顓頊とれ  
り。次て。在位七十八年と。陟去し。帝嚳とれり。次て。在位六



壬子歳尔夏禹王即位せり。是より十八代。凡四百三十一年  
にして。桀王が三十一年壬戌歳。殷湯王が亡さぬ。是は  
竹書紀年と能く合ふ。但し紀年比沈注了。自禹至桀十  
七世。用歳四百七十一年と有ぬ。算を謬れるなり。前漢の  
歴志了。夏后氏継世十七王。四百三十二歳と有ぬ。合ふぞ。  
三統上元至桀之歳。十四万一千四百八十歳と云。亦も妄  
誕あり。史記を始也。他書亦も相違とも有れど。論ふり足らば。  
是より殷世と成れる。三十代凡五百八年にして。紂王受と云。亦も五十二年庚寅歳  
の。周武王姫發尔亡はぬ。世に在る編年類の書等亦も其滅せ  
ぬ年を己卯と云。亦も非説なり。此五百八年庚寅歳と云。こ  
一り算して知れる数あり。然るを紀年比沈注了。自成湯滅  
夏。以て千受二十九王。用歳四百九十六年と有ぬ。亦も稽覽圖  
と合れど。本文尔從れる。今比算小合交。亦も歴志了。自伐桀  
至武王伐紂。六百二十九歳と云。劉歆が説を殊り非あり。

總て謂ゆる三代の年数の事も、別は三統歴譜  
辨といふ物も著して、委く論ふを見る所し。はて是より  
周世も成る。三十四代。凡七百七十五年にして。赧王と云。  
亦も五十九年乙巳歳。秦は降參して滅び。亦も其同宗。  
東周、惠公と云。亦も在りし。七年のち壬子歳。秦は亡さぬ。  
此七年をも加ふれば、七百八十二年なり。赧王を竹書紀年  
り。斯て其紀年を、隱王が十六年まで終る故り。其より  
り。後沈、史記の六國表を始也。諸書を參考して、算せる年数  
あり。然るに、稽覽圖に、周八百六十七年と云。亦も武王が父  
此文。王元年を計り、年数あり。文王元年を計り、父  
実り。は八百六十五年なり。其は亦も紂  
王が世系れ。然るに、計り、非也。是より後は、定ま  
れる。王統亦も三十餘年が不と。謂ゆる戦國七雄互に挑み  
争ひり。亦も彼、赧王が亡びし乙巳歳より。三十六年。亦も庚



